2018

文集　はと笛

平成30年度 第49回
弘前市小・中学生読書感想文コンクール
入　選　作　品

文集　はと笛　二〇一八

弘前市立弘前図書館

弘前市立弘前図書館

文集 はと笛

二〇一八

平成30年度　第四十九回
弘前市小・中学生読書感想文
コンクール入選作品

審査の先生

弘前市立郷土文学館　企画研究専門官	櫛引洋一
弘前市国語教育研究会	福田真実
弘前市国語教育研究会	猪股健
弘前市小学校学校図書館教育研究会	野村聡
弘前市小学校学校図書館教育研究会	福田文浦
弘前地区中学校教育研究会国語部会	竹内徹
弘前地区中学校教育研究会国語部会	鈴木敏浩
弘前地区中学校教育研究会国語部会	中村真木子

（順不同・敬称略）

巻頭言　曲り角のさき

いま曲り角に来たのよ。曲り角を曲がったさきに何があるのかは、わからないの。でも、きっといちばんよいものにちがいないと思うの。

モンゴメリの名作『赤毛のアン』の一節です。主人公の赤毛のアンが、進路決定という「人生のわかれ道」で、自分の進む道を堂々と表明した時の言葉です。アンは、孤児であった自分を育ててくれた養父・養母の家、グリーンゲイブルズ（緑の切り妻屋根）を守るために、大学進学ではなく地元で教師をする道を選んだのです。

『赤毛のアン』を翻訳したのは村岡花子（一八九三～一九六八・山梨県）。数年前、ＮＨＫの朝の連続テレビ小説「花子とアン」の主人公のモデルとなりました。この本を村岡花子が翻訳したのは、多くの人々が命を落とし街が廃墟と化した、悲惨な太平洋戦争のさ中でした。『赤毛のアン』は、戦争へと向かう「困難極まる時勢」に、母国カナダに帰る女性宣教師から託された一冊（原題：Anne of Green Gables）でした。「いつかまたきっと、平和が訪れます。その時、この本をあなたの手で、日本の少女たちに紹介してください」

村岡花子は、アンが夢をもとめて前に進む不屈の精神に励まされ、平和な時代はきっとやってくると信じて翻訳を完成させたのです。

曲り角を曲がったさきに何があるのかは、わからないの。でも、きっといちばんよいものにちがいないと思うの。

アンのこの言葉は、私たちが人生の様々な分かれ道や困難に出会った時、不屈の精神でしっかりと立ち向かう勇気を与えてくれます。

さて、今回の読書感想文コンクールで小学校六年生の審査にあたった福田真実先生が、講評に次のようなことを書いています。「『本の力』を生きるエネルギーへと変えた作品67編と出会いました。小学校を終える区切りのひとつとして、本に向き合い、自分に向き合う行為の尊さに思いをはせます。」

『赤毛のアン』の言葉が、分かれ道や困難に立ち向かう勇気という「生きるエネルギー」を与えてくれたように、コンクールに応募した皆さんは、それぞれが読んだ一冊の「本の力」を、それぞれの生きるエネルギーへと変えたのです。あらためて、本の力の素晴らしさを思います。

来年もまた、「生きるエネルギー」を与えてくれる皆さんの「名文」と出会えることを楽しみにして、審査の講評を終わります。

審査委員代表　櫛　引　洋　一

第四十九回　弘前市小・中学生読書感想文コンクール　入選作品

文集はと笛　二〇一八　目次

巻頭言　櫛引洋一

小学校

◎三年の部

第一席　命とお金の大切さ　弘前市立第三大成小学校　桑村大智　9
第二席　『音楽室の日曜日』　弘前市立松原小学校　齋藤莉緒　10
第三席　『一〇〇万回生きたねこ』を読んで　弘前市立大成小学校　小堀和華　11
佳作　『最後のオオカミ』を読んで　弘前市立豊田小学校　阿保空斗　12
佳作　『お昼の放送の時間です』を読んで　弘前市立福村小学校　造田陽央里　14
佳作　大切なもの　弘前市立第三大成小学校　對馬璃音　15

◎四年の部

第一席　みんなの通学路が安全になるといいな　弘前大学教育学部附属小学校　山口青空　17
第二席　みんなで助け合う『ブルキナファソ』を読んで　弘前市立第三大成小学校　丹代音澄　18
第三席　〝仲のよい友達〟『おはなし』を読んで　弘前市立第三大成小学校　伊藤咲結　19

佳作　『しっぱいにかんぱい』を読んで　弘前市立城西小学校　坂本あおい　21
佳作　がんばるということ　弘前市立第三大成小学校　建部佑斗　22
佳作　戦争から学んだこと　弘前市立第三大成小学校　藤田亜望　23
佳作　『くもの糸』を読んで　弘前市立福村小学校　千葉晴登　24

◎五年の部

第一席　正義のヒーローとは　弘前大学教育学部附属小学校　林大晴　26
第二席　苦しくても最後まで精一杯がんばる　弘前市立城西小学校　佐々木理子　27
第三席　『星の王子さま』を読んで　弘前市立大成小学校　立田美月　28
佳作　命は一つだけ　弘前市立文京小学校　齋藤伊輝　29
佳作　どんなことがあっても冷静に　弘前市立第三大成小学校　赤川伴弥　31
佳作　これからも平和を願って　弘前市立東小学校　落合さくら　32

◎六年の部

第一席　出会いはすべてを変える　弘前大学教育学部附属小学校　葛西華那心　34
第二席　そうじとディズニーの魔法　弘前市立福村小学校　漆舘野乃　35
第三席　可能性は無限大　弘前大学教育学部附属小学校　葛西心美　36
佳作　〝考動〟について　弘前大学教育学部附属小学校　福村悠人　37
佳作　天使が教えてくれたこと　弘前市立第三大成小学校　大湯日花里　39
佳作　『アンネ・フランク物語』を読んで　弘前市立城東小学校　荻野桜子　40
佳作　改めて気づいた森林の大切さ　弘前市立福村小学校　造田紗央音　41

中学校

◎一年の部

第一席　『ある晴れた夏の朝』　弘前市立第一中学校　鎌田莉央　45
第二席　善と悪の選択　弘前大学教育学部附属中学校　齋藤舞衣　46
第三席　和菓子、洋菓子、はなやかなのは？　弘前大学教育学部附属中学校　小島わこ　48
佳作　生かされ生きぬくこと　弘前大学教育学部附属中学校　永井嘉泰　50
佳作　小さなつながりの大きな世界　弘前大学教育学部附属中学校　葛葉小雪　52
佳作　私も『また次の春へ』　弘前大学教育学部附属中学校　三上玲央　53

◎二年の部

第一席　『火垂るの墓』を読んで　弘前大学教育学部附属中学校　三浦夏帆　56
第二席　『一〇五度』を読んで　弘前大学教育学部附属中学校　川村勇太　58
第三席　『代筆屋』を読んで　弘前大学教育学部附属中学校　北山沢　60
佳作　『名人伝』を読んで考えたこと　弘前市立新和中学校　髙橋香圭　61
佳作　自分に必要な力　弘前市立第一中学校　三浦可帆　63
佳作　誰かのために　弘前市立第二中学校　竹森菜奈　65

◎三年の部

第一席　いつだって〝人間〟であるために　弘前大学教育学部附属中学校　小島にこ　67
第二席　彼に手紙を書けるなら　弘前大学教育学部附属中学校　西田その　69
第三席　『にじいろガーデン』　弘前市立第二中学校　佐藤和奏　71

佳作　本当の自分を　弘前市立第一中学校　鎌田笑歌　73
佳作　『永遠の0』を読んで学んだこと　弘前大学教育学部附属中学校　三上萌衣　74
佳作　私の幸せ　弘前市立南中学校　対馬蘭　76
応募作品審査講評……79
努力賞一覧……88
感想文の対象となった図書……89
読書感想文コンクール応募学校と応募作品点数の推移……98
第49回（二〇一八）読書感想文コンクール応募作品数……98
平成30年度第49回弘前市小・中学生読書感想文コンクール応募要項……99
編集後記……100

編集にあたって

一、作品の中で使用する漢字は、小学校の場合、それぞれの学年の教育課程に応じたものを用い、学年を超えるものについてはふりがなをつけました。
　中学校の場合は、常用漢字表以外のものについてはふりがなをつけました。

一、感想文のタイトル中に、対象となった作品が掲げられている場合は、作品を示す記号として『』に統一しました。

一、感想文のタイトルにサブタイトルがある場合は、区別する記号として～　～を付けることで統一しました。

一、感想文のタイトル中に強調の意味で「」が使用されている場合は〝〟に置き換えました。

一、感想文のサブタイトルに「○○を読んで」とある場合は、これを省略しました。

小学校 三年 四年 五年 六年の部

命とお金の大切さ

弘前市立第三大成小学校　桑村大智

みなさんは、もし五百円玉を拾ったら、どうしますか。

五百円玉は、ぼくにとっては、少し大金です。だから、ちょ金をして、買いたいものを考えて後でたくさん買うと思います。

この本は、主人公のめいちゃんがしゃべる五百円玉を拾ったところからはじまります。

「オレさまで、すきなものを買いなよ。」

と、五百円玉に言われたためいちゃんは、五百円玉の使い道をいろいろ考えます。おかしをたくさん買おうとしましたが、五百円では足りなかったり、カメを買おうと思ってもケースやえさ代が足りなかったり…。五百円のお花を買おうとしたら、消ひぜい分が足りませんでした。それでも、五百円玉を大切に使おうとしているめいちゃんと、いろいろ文句のように言いながらも、めいちゃんのことを心配しているような五百円玉がおもしろいなあと思いました。

ぼくは、この五百円玉は神様から心をもらったと思います。そして、めいちゃんのところにあらわれたのも、神様のしわざのような気がします。

なぜなら、さいごにめいちゃんが五百円玉で手に入れたものは、思いもよらなかったものだからです。それは何だと思いますか。

めいちゃんは、空き地でカラスにおそわれそうになっている子ねこを助けるために五百円玉を投げつけたのです。五百円玉は消えてしまいましたが、めいちゃんは子ねこを手に入れたのです。お金では買えない命を手に入れたのです。ぼくは、勇気があってやさしいめいちゃんがいいなあと思いました。そして、消えた五百円玉も気になりました。

この本を読んで、お金には、いろいろな使い道があることを知りました。そして、お金を使うときには、よく考えて、大切に使わなければいけないことに気づかされました。しゃべる五百円玉は、読者のぼくにもお金について考えるきっかけをたくさんあたえてくれました。だから、ぼくもこれから

は、よく考えてお金を使いたいです。そして、買ったものを大切にしていきます。お金で買えないものの大切さもわすれないですごしたいです。

もしかしたら、みなさんの近くにも、めいちゃんがなくした五百円玉がいて、話しかけてくるかもしれませんよ。

小学校三年の部　第二席

対象作品／村上しいこ著『音楽室の日曜日　歌え！オルガンちゃん』講談社

『音楽室の日曜日』

弘前市立松原小学校　齋藤莉緒

わたしが、『音楽室の日曜日』を読みたくなったのは、表紙の絵がおもしろそうだったので読みたくなりました。この本の内ようは、学校の音楽室の楽きが生きていて、その楽きたちの日曜日をえがいた本です。

この本は読んで思ったよりも気持ちがウキウキしてさらには感動もあたえてくれた本です。読む前はただたんにおもしろいだけかと思っていました。

この本の作者は「人びとのたすけ合いが大切である。」ということを読者につたえたいのだと思いました。理由は、オルガンちゃんはあがりしょうで楽きの仲間が音楽会などの音をならさなければいけない時に、あがらない方ほうを楽きたちがさがしてくれたというところからわかりました。

わたしもオルガンちゃんのようにあがりしょうのけいけんがあります。学校のじゅ業中にあてられ、みんなが注目したとたんに言いたいことがあったのに頭の中が、急に真っ白になってはずかしい思いをしたことがあります。そんな時、そのあがりしょうにならないように考えてくれる人が一人でもいたらわたしはとにかくかんしゃするだろうと思います。

びっくりしたのは、ハイドンをよぶときに、ハイドンは行くのをきょひしていて、楽きたちが「せーのハイ、ドン。」といったらハイドンが出てきてすっごくびっくりしました。

次にこわかった場面は、次の場面です。カスタネットがネコ科病とうに遊びに行った時にライオンにつかまってしまってさっき、言ったとおりのやり方でハイドンをよび出し、ラ

イオンの子守歌をオルガンでひいてライオンがねむったところでカスタネットがにげだそうとしたら、カッパ温せんのおばちゃんが思い出したことを口に出してしまい、ライオンがねむりからめざめてしまって、ライオンがにげだそうとしているカスタネットにとびかかり、あともうちょっとでカスタネットはにげられなかったところです。カスタネットがにげられなかったらと思うとぞくっとしますね。

かっこいいところは、ちょっと前にもどりますが、ハイドンをよぶ時、時間がなかったのでおばちゃんの車に乗せてもらうのですが、おばちゃんの車が赤のスポーツカーだったというところです。かっこいいし、おもしろいですね。おばあさんになってもこのくらい自信があったらいいですね。

今後、わたしはずっと自信を持って、何でも取り組むということと、人びとがこまっている時に助けてあげるやさしい心を持てる人になりたいです。

対象作品／佐野洋子著『一〇〇万回生きたねこ』講談社

小学校三年の部　第三席

『一〇〇万回生きたねこ』を読んで

弘前市立大成小学校

小堀和華

わたしは、小さい時からこの本を持っていました。おばあちゃんが買ってくれたそうです。読んで聞かせてもらったり、絵を見てねこの真ねをしたりしていました。今回、感想文を書くためにはじめて自分で全部読んでみました。そうしたら今まで何回も読んでもらっていたはずなのに、ちがう発見がたくさんありました。

この本は、何回ものねこの人生を書いていました。どうして一〇〇万回なのかなあと題を見て思っていましたが、それほど言いあらわせないくらいたくさん、このねこがけいけんしたということなのだろうなと思いました。書き方が全部同じで読みやすかったです。文章と絵が組み合わさっているのでイメージしやすかったです。絵はまるで絵のぐでかいたばかりのようなにじみとかがあって、何回もさわってみました。でも、でこぼこしているところはありませんでした。どんど

ん次が読みたくなって、あっという間にさい後のページでした。

ねこは、だれにかわれてもしあわせではなかったから、一回もなかなかったし、なっとくがいかないから何回も生き返ったのかなと思います。でものらねこになった時、はじめて自分の人生で自分のことが大すきだという気持ちがわいて、生きていることを実感していました。たくさんのめすねこにすかれて色々なアプローチをうけたのに、全く自分にきょう味がなさそうなめすねこにひかれて、びっくりしました。白いねこのどこがすきだったのかなあ。今までかわれてきたかい主のことはみんなきらいで、自分のことが一番すきだったのに、白いねこに会って、自分よりもすきになるということがすごいへんかだなと思いました。そして今まで一度もないたことがなかったのに、白いねこが死んで自分が死ぬまでなきつづけるのは、本当にすごいと思いました。それだけ白いねこがすきだったんだなと思いました。

さい後にもう生き返らなくなったのは、白いねこがいないところに生き返っても仕方がないと思ったからかなと感じました。白いねこに会えて、相手をすきな気持ちやしあわせ、かなしみが分かってよかったなと思いました。ねこはもう生き返らないけど、さい後にとてもしあわせな人生を送れてわたしもうれしくなりました。ねこと白いねこは、天国でしあわせにしていると思います。

小学校三年の部　佳作

『最後のオオカミ』を読んで

弘前市立豊田小学校　阿保空斗

ぼくがこの本を読んだきっかけは、動物が好きなので、表紙の絵のオオカミのすがたと題名にひかれたからです。

この話は、あるおじいさんが自分のルーツをさがすことから始まります。父方の祖先が分からず、インターネットを通じてさがしあて、自分の祖先にあたるロビーのゆい言書を読むことができました。そこで、ロビーと最後のオオカミのそ

対象作品／マイケル・モーパーゴ著『最後のオオカミ』文研出版

うぜつな人生を知りました。
　ロビーは小さいころに両親を亡くし、おじに引き取られましたが、つらい少年時代をすごしました。十二才の時、たえきれずにとび出して一人で生きることにしました。つらい毎日でしたが、両親代わりのやさしいふうふに出会い、今までとはくらべものにならないほど幸せになりました。しかし、そんなくらしは三年で終わってしまいました。スコットランド軍とイギリス軍の戦争が始まり、ロビーは、母親が止めるのも聞かず、父親といっしょに戦争に行くことにしたからです。戦場で父親が目の前で殺されてしまい、ロビーは戦場からにげ母親のいる家にもどりました。しかし、村はイギリス兵にやられた後で、母親も亡くなっていました。ロビーはまた一人ぼっちになってしまいました。
　それから、イギリス兵からにげてくらす毎日でしたが、ある時、気がつくとイギリス兵におわれていました。じゅう声がして、もうだめだと思いましたが、うたれたのはスコットランド最後のオオカミでした。ロビーは、自分の身代わりになってくれたと思いました。だから、近くで一匹のオオカミの赤ちゃんと出会ったときは、自分と同じ境遇（きょうぐう）のひとりぼっちだと感じ、自分がオオカミに助けられたから、今度は自分が助ける番だと思いました。そして、そのオオカミにチャーリーと名づけいっしょにくらすことにしました。
　ロビーはチャーリーをとてもかわいがり、なかよく、力を合わせながらくらしていきました。チャーリーが心のささえとなり、つらいことも乗りこえることができました。
　その後、たくさんの出会いや別れ、つらいことがありましたが、チャーリーがいたからがんばれました。大人になったチャーリーが野生にもどりたがっているように見えたロビーはさみしかったけれど野生にもどしてあげました。チャーリーもロビーの愛情を感じていたので、その後、家族ができて幸せにくらしているすがたを見せに、子どもを四匹も連れて会いに来たのだと思いました。
　ぼくは、この話を読んで、戦争のつらさと仲間の大切さを知りました。特に、自分にとって大切な仲間がいると、つらいことがあっても、それをがまんしたり立ち向かったりして、乗りこえることができるのだと感じました。だから、仲間を大切にすることを忘れずに、これから生きていこうと強く思いました。

対象作品／乗松葉子著『お昼の放送の時間です』ポプラ社

『お昼の放送の時間です』を読んで

弘前市立福村小学校　造田陽央里

わたしは、『お昼の放送の時間です』というお話を読みました。この本を読んだ理由は、タイトルが、セリフみたいでおもしろそうだなと思ったからです。

四年生のかえでは、おしゃれな放送をしたくて、三年生のころからきめていた放送いいんになりました。しかし、かえでと同じ曜日に放送するペアになったのは、なかよしのきりちゃんではなくおちょうし者の同級生、こうへいでした。こうへいは、放送の時、へんてこな学校クイズを出したり、ひまだと言ってかえでの放送によけいなこうか音を入れたりしてくるので、わたしは、こうへいってへんな人だなと思いました。でも、こうへいの家に行ったり、こうへいのお母さんに会いに、いっしょに電車に乗って行ったり、そのあとさくらがおかゆうえんに行ったりしているうちに、ちょっとずつこうへいのいいところが、かえでは分かってきたんだと思います。そして、わたしもこうへいのよさを感じてきました。

こうへいは、三年生の夏休み、お父さんとお母さんがりこんして、本当は、お母さんとくらしたかっただろうと思うけど、お父さんが一人だとかわいそうだから、お父さんにはこうへい、お母さんには弟と決めていて、こうへいは、やさしいんだなと思いました。

前、放送で三年の二学期から上ばきを洗っていないと言っていたけど、お母さんとはなれてくらしているからなのかなと思いました。こうへいは、明るく言っていたけど本当はさみしい気持ちを、がまんしているのかなと思いました。

はじめは、相手のいいところが分からなくていやだなとばかり思っていたけど、さい後は相手のことをおたがいに思いやれていて、よかったなと思います。

わたしは、このお話を読んで、はじめはいやだなと思っても、やれば楽しいなと思ったり、いいことがあったりするんだなと思いました。もし、この本のつづきがあれば、もっともっとこうへいとかえでの放送を、聞いてみたいです。

小学校三年の部　佳作

対象作品／村椿菜文著『まいごのビーチサンダル』あかね書房

大切なもの

弘前市立第三大成小学校　對馬璃音

わたしは、夏休みの宿題で、はじめて読書感想文を書くことになりました。本屋さんへ行き、読書感想文をおすすめコーナーにあった、夏っぽい題名と表紙で、本のおびの「読んだら、ぼうけんしたくなる本です」という文にひかれて、この本をえらびました。

このお話は、ビーチサンダルの、ビーとサンが、いつもはいてくれているコウくんと、はなればなれになっている間に、サンがいろいろなぼうけんをするお話です。

わたしは、さいしょ、いつもいっしょだったビーとサンとコウくんがはなればなれになってしまって、かわいそうだなあと思いました。もしもわたしが、いつもいっしょのお母さんとはなれたら、さがしに行けるかふあんだし、こわくなります。

特に心にのこったところは、なみにさらわれ、おきに流されていくサンのぼうけんです。海の中で、サンは、サンゴのたまごたちや、大きな魚、リンゴに出会い、みんなも悲しいわかれをしていることを知るのです。一人で生きていくみんなの思いを知りながらも、まだ、大切な人に会いたい、伝えたいことがあるというサンの思いがとても強く感じられました。トンビにさらわれたときは、どきどきしましたが、さいごはサンがビーや、コウくんに会えてほっとしました。

ビーとサンとコウくんは、今までずっといっしょだったから、こんなふうに思えるんだろうなあと思います。

わたしは、三年生になって、さい玉から弘前へ転校してきました。今までずっといっしょだった大すきな友だちとのおわかれは、さみしくて、悲しくて、なみだが止まりませんでした。でも、サンのように、また友だちに会いに行きたいなあと思いました。そして、新しい学校でのことをたくさん教えてあげたいです。

この本を読んで、自分にとって大切なものは何か、また、その大切なもののことを大切にして生きてきたのかなあと考えました。まわりの人たちのやさしさにも気づかされました。

これからは、わたしのまわりにいる大切な人たちに、自分の思いを伝えて、みんなにやさしくして生きたいです。

対象作品／ローズマリー・マカーニー著『すごいね！みんなの通学路』西村書店

みんなの通学路が安全になるといいな

弘前大学教育学部附属小学校　山口青空

ぼくの通学路は、学校まで歩いて二十五分。信号は三つあって毎朝ぼくたちを見守ってくれるおじさんがいます。「ひょうたん池」とよばれているため池もあって毎日いろんな鳥の鳴き声も聞こえてきます。と中で同じ学年の友達と会えるときもあります。するといつもの通学路は急に楽しい通学路に変身します。友達とどんな遊びをするのか相談しながら歩くとわくわくします。ぼくが学校がすきなのは友達と遊べるからです。もちろん勉強も大切だと思いますが、休み時間が一番楽しみです。朝の通学のおしゃべりもとても楽しみです。だからこの本を読むことにしました。

はじめは外国の子どもたちはバスや電車で学校に行くのかと思いました。でも、この本を読んでびっくりしました。川を歩いてわたったり、船を自分たちでこいでわたったりしている写真がありました。ぼくみたいに楽しくしゃべっている子は一人もいなくてみんな足元を見たり、川の流れを見たりして必死で通学していました。たった一本のロープで、空中をとんでいる写真もありました。一回ぐらいは楽しそうだけど本当に毎日こんなこわいことをして通学するのかとぎもんに思いました。はしごで山やがけを上っていて、もし落ちたら命がないような写真もありました。四年生のぼくよりも小さい子たちが命がけであぶない道を通って通学していました。

外国だけではありません。写真にはぼくたちの国日本の写真ものっていました。それは津波の後の写真でした。がれきがたくさんある中を歩いて学校へ向かっている写真でした。家が流され、いろんな物がこわれている中を歩いて通学していました。こわくて不安だろうなと思いました。今年の七月には西日本に大雨がふってどろ水が流れこんできたのをテレビで見ました。あそこの子どもたちは今どうやって通学しているのか心配になりました。早くいつも通りに学校に行けるといいです。

みんなこんなにたいへんなのに、なんで学校に行くのかなと考えました。ぼくと同じ、友達に会って遊びたいからかも

しれません。勉強がすきな子も、本がすきな子も、いると思います。ぼくも学校が大すきです。なぜなら学校には友達がいるからです。四年三組には二十六人の友達がいて毎日いっぱい遊んでいます。ぼくの学校には五百四十人くらいのなかまがいます。なかまがいるって思ったらうれしくなりました。ぼくたちの日本のようにみんなが安心して学校に通えるような平和な世界になるといいです。そんな世界を目ざしてぼくたちは今勉強をがんばります。

小学校四年の部　第二席　――――　対象作品／M・マエノ著『ブルキナファソマリアムのサバンナ日記』偕成社

みんなで助け合う『ブルキナファソ』を読んで

弘前市立第三大成小学校　丹代音澄

「え、そんなきたない水を飲んでいるの。」

水の勉強で、水道が無い国のことを調べました。川の水を使う国や、遠くから水を運ぶ国もあって、びっくりしました。そういう国の生活を、もっとくわしく知りたいと思って、読み始めました。

この本には、あまり生活が楽では無い西アフリカの国、ブルキナファソのマリアムという女の子の生活が書かれています。

一番心に残ったのは、手伝いの量です。ぼくもおじいちゃんの畑仕事の手伝いをたまにしますが、ブルキナファソの子どもたちは、比べものにならないくらい、毎日いろいろなジャンルの手伝いをしています。たきぎ拾いに食器洗い、洗たく、水くみ、食事のしたく、畑をたがやす手伝い、はたおりの手伝い、一日の生活が手伝いだらけです。マリアムは、大人に近いのかと思ったら、まだ小学五年生だったので、もっとびっくりしました。学校で楽しく勉強し、サッカーをやって、友達と遊んでいるぼくの生活とは全然ちがいます。

次におどろいたのは、家族のことです。マリアムのお父さんには奥さんが二人います。回教は数人のつまをもつことをゆるしているので、こんなことになるのだそうです。ぼくのお父さんにもう一人おくさんがいたらいやだなあと思いましたが、理由が全然ちがいました。それは、子どもを多く産ん

で、働く人をふやしたいからだそうです。マリアムの村には病院が無くて、医者にみてもらうには、歩いて一日かかります。昔は四人に一人の子どもが病気で死んでいたそうです。ぼくは三人兄弟なので、何だかいやな感じです。たくさん死んでしまうからたくさん産むという考えは、ぼくたちが勉強している「たった一つしかない命を大切にする」という考えとはちがう気がして、少し悲しくなりました。

マリアムの生活には、まだおどろきがたくさんあります。朝は太陽が昇らないうちに、八百メートルはなれた井戸まで水をくみに行きます。皮ぶくろで水をくみ、約十キロもの重さになるバケツを頭にのせて運びます。朝早くからそんなに重い物を運ぶなんて、ぼくにはとてもできそうにありません。学校の教科書は三、四人に一冊しかなく、ノートも買えないので、教科書を読んだり、先生が話すことを耳で聞いて覚えたりする勉強法だそうです。ぼくの当たり前は、ブルキナファソでは当たり前では無いことが分かりました。

ぼくたちはすごく便利な生活をしていて、豊かです。ブルキナファソの人たちは、豊かではないけれど、家族や地域の人たちで助け合って生活しています。子どもだからやらなくてもいいということはありません。ぼくは、物の豊かさになれてしまわないで、助け合って生活する、マリアムたちのまねをしたいと思いました。

小学校四年の部　第三席　――――　対象作品／アーノルド・ローベル著『ふたりはともだち』文化出版局

〝仲のよい友達〟『おはなし』を読んで

弘前市立第三大成小学校　伊藤咲結

この本を選んだのは、一年生の時に学習した『おてがみ』がきっかけです。お手紙をもらったことがないと悲しむがまくんのためにかえるくんが手紙を書き、二人でとどくのを待つお話です。手紙を書いたといわずに、

「きっとくるよ。」

とはげまし続けるかえるくんのやさしさが心に残っていたので、他の話も読んでみたいと思いました。

一番心に残ったのは『おはなし』です。病気になったかえ

るくんは、がまくんに
「おはなしをしてちょうだい。」
とねだります。がまくんはかえるくんのために必死にお話を考えるのです。

心に残った場面は、かえるくんのために必死にお話を作っている場面です。家の前をぶらぶらしてみたり、さか立ちしたり、頭に水をかけたり、頭をかべにドシンドシンとぶつけていたところが印象的でした。もしもわたしががまくんで、友達に同じ事をたのまれたらどうするでしょう。どんなお話にしたらいいか、あまり思いつかず、がまくんと同じようにしてしまうかもしれません。かえるくんに元気になってほしくて、じっとしていられないがまくんの気持ちが、とても伝わってきました。ただお話を作ればよいのではなく、このお話でかえるくんの病気を追い出したかったのだと思います。

作者は、たとえ、がまくんがお話を作ってあげられなくても、かえるくんにがまくんの気持ちは伝わるよということを言いたかったと思います。なぜなら、かえるくんは自分のために必死に考えてくれたことがうれしくて、がまくんが病気になった時、今度は自分が、がまくんがしてくれたことを話して聞かせたのです。きっと、ぼくのためにこんなに一生けん命になってくれてありがとうと言いたかったから、「おはなし」にして返したのだと思います。

がまくんとかえるくんの物語は小さい子でも読めます。その中には、ほわっと心が温かくなる場面がたくさんあります。がまくんとかえるくんの本を全部読んでみると、主人公の二人は、とても仲のよい友達だということが分かります。わたしにも友達がいます。がまくんとかえるくんのようにいつも二人でいっしょにいるというよりは、たくさんの仲のよい友達がいます。二人がたくさんになっても、がまくんとかえるくんのように、おたがいに助け合って、みんなと仲よくしたいと思いました。

そのためには、相手のことを大切に思うことが大事だということも分かりました。自分がこうしてあげたいということではなく、友達はどうしてほしいのかなということを考えて、友達がこまっていたら、力になれる人になりたいと思います。

『しっぱいにかんぱい』を読んで

弘前市立城西小学校　坂本　あおい

対象作品／宮川ひろ著『しっぱいにかんぱい』童心社

このお話に出てくる加奈は、運動会のリレーのアンカーに選ばれましたが、加奈がしっぱいをしてしまい、チームが失かくになりました。加奈はとても落ちこんで、だれとも話さなくなってしまいました。

加奈はとてもわたしににているなぁと思いました。

私は今、ミニバスケットボールクラブに入っていて、シュートがいつもより決まらなかったり、ディフェンスがうまくできない時など、試合中でも泣いてしまい、チームにめいわくをかけてしまいます。なぜ泣いてしまうのかなぁとこうかいして、思い出すのもいやになります。

加奈が落ちこんでいる時、加奈のおじいちゃんから、「加奈の好きなハランずしを食べよう。」と電話がありました。親せきがたくさん集まっていました。ぐうぜんに、みんなでしっぱい話をすることになりました。しんせきのみんながいろいろなしっぱい話をしていくと、加奈はじょじょに元気をとりもどしていきました。最後には「しっぱいにかんぱいだ！」と言ってみんなでかんぱいしました。

その時加奈が、「わたしはね、とんでもないしっぱいをして、みんなにめいわくをかけちゃったの。わたしのしっぱいも笑って話せる日がくるかしら。」と言いました。

私はこの言葉がとても心に残りました。そして、しっぱいって不思議だなあと思いました。しっぱいした時はくやしかったり、悲しかったりするけど、後から「次に生かそう」とか、「次は同じしっぱいをしないようにしよう」と思うからです。しっぱいはいやなことだけど大切なものでもあると思いました。

今度のバスケの試合の時には、もししっぱいしても泣かないようにしてがんばりたいです。

みんなのしっぱいに、加奈のしっぱいに、そして、私のしっぱいにかんぱいだ！

対象作品／岡田　淳著『びりっかすの神さま』偕成社

がんばるということ

弘前市立第三大成小学校　建部佑斗

「ひとに勝つことが、がんばるっていうことだったら、始、お母さんはあなたに、がんばってほしくなんかないのよ。」この言葉にぼくはおどろきました。それは、がんばるというのは大事なことで、よいことだと思っていたからです。

ぼくは、サッカーをやっています。でも、なかなか上手にできません。リフティングの回数は他の子より少ないし、シュートも、他の子は高く飛ぶのに、ぼくのはころころボールです。他の子と同じようになりたいし、できれば他の子よりも上手になりたいと思っていました。お父さんやお母さんからも、がんばりなさいとよく言われます。他の子に追いつくように、そして追いこすようにがんばらないといけないと思っていました。だから、「がんばってほしくなんかないのよ」という言葉にびっくりしてしまいました。

その始のお母さんも、一組がリレーで大逆転勝利をした時は、喜びました。それは、みんなが本気でがんばったからです。きっと始のクラスのみんなは、負けないようにという気持ちでがんばったのではなく、こんなんなことに対してただ力をふりしぼって立ち向かっていっただけだと思います。だから、お母さんを感動させたのだと思います。

ぼくは今まで、人より試合に出られないとがっかりしたり、人より上手になりたいと思ったり、人と比べてばかりでした。でも大事なことは、人と比べるのではなくて、自分にとってむずかしいことに対してもせいいっぱい努力して乗りこえることだと気が付きました。

ぼくは夏休み中、本気の努力をしてみようと思いました。まず、練習の前に進んで道具のじゅんびをするようにしました。それからおしゃべりをしないで練習に集中するようにしました。練習がない日は、近くの公園に行って、お父さんとお兄ちゃんといっしょにシュートやパスやドリブルの練習をしました。苦手なリフティングやドリブルが前より少しできるようになってきたと思いました。

八月十一、十二日、岩手で試合がありました。二日目、と

中から試合に出ました。味方のチャンスボールになりました。相手のゴール近くまでせめ上がり、味方がシュートを打ちました。ボールはキーパーにはじかれて、転がったので、そのボールを直せつけってシュートを打ちました。するとボールは、ゴールの左側に入りました。仲間からナイスと言われました。ボールをうまくコントロールしてけれたことがうれしかったです。それからチームの役に立てたことが、もっとうれしかったです。

今までのぼくは、自分と人を比べてばかりでした。これからは、人に勝とうと思ってサッカーや勉強をがんばるのではなく、自分にとって難しいことや大変なことにも立ち向かい、本気の努力をしていきたいと思います。

小学校四年の部　佳作

対象作品／田島征彦・吉村敬子著『ななしのごんべさん』童心社

戦争から学んだこと

弘前市立第三大成小学校　藤田亜望

ぼくは、『ななしのごんべさん』という本を読みました。それは今から七十五年前、七月九日、大阪さかいの大空しゅうの話です。

主人公のもも子には、足にしょうがいがあります。それは、「のうせいまひ」という、生まれつき頭の中で思っていることが、手や足にうまく伝わらない病気です。それでも、もも子は、みんなと学校で勉強や友だちを作りたいと思っていました。

しかし、戦争のあった時代は、「歩けない子は学校へ行ってはいけない。」という考えがありました。もも子は、どんなに悲しくて、みじめに思ったでしょう。

もも子には、戦争に行ったお父さん、おなかに赤ちゃんのいるお母さんがいます。

そこへある日、親せきのまもるとまさるの双子の兄弟が引っこして来ました。まもるとまさるは、いたずらっ子ですが、学校に行けないもも子とは、仲良しでした。まもるとまさるは、もも子に手作りの人形をあげました。もも子はその人形に「ななしのごんべさん」と名づけ、戦争で亡くなったお父

さんを思って大切にしていました。
ある日の真夜中、しょういだんがもも子たちをおそいました。おなかの大きいお母さんは、もも子をうば車に乗せて、必死ににげました。しかし、周りは火の海でお母さんは亡くなってしまいました。
もも子は、お母さんとはぐれてしまいましたが、まもるとまさるに命を救ってもらいました。大事にしていたななしのごんべさんもいっしょです。
この大空しゅうで大阪のさかいの町では、亡くなった人は千三百九十四人、けが人は、千五百七十四人でした。だれにも探してもらえず、身元の分からない「ななしのごんべさん」もたくさんいたそうです。
ぼくは、戦争を知りません。ぼくのおばあちゃんもおかあさんも戦争を知りません。しかし、ぼくはこの本を読んで、二つの大切なことを学びました。
一つは、しょうがいがあっても平等にしていく世の中です。人とちがうこと、できないことはいけないことではありません。しょうがいがあっても家族からあいされて、人は一生けん命生きています。戦争の時代も今の時代も、決してさ別はあってはいけません。
二つ目は、命の大切さです。戦争は、「人が人を殺す」おそろしいことです。つみのないたくさんの命がうばわれることは、とても悲しいことです。だから戦争は、決してあってはいけません。
ぼくはこの本を読んで知った「戦争のおそろしさ」、「命の大切さ」を大人になってもわすれません。

小学校四年の部　佳作

対象作品／芥川龍之介著『杜子春　蜘蛛の糸』角川書店

『くもの糸』を読んで

弘前市立福村小学校　千葉晴登

「みんなかわいそうだな。」
ぼくは『くもの糸』を読み終えて、そう思いました。なぜなら、おしゃか様は、かんだたを信じていたのにうら切られてしまい、かんだたも、天国へ行くチャンスを与えられたのに

糸を切られ、地ごくへもどってしまったからです。とても残念な結末だと思います。

作者はなぜバッドエンドで終わらせたのでしょうか。ぼくが作者だったら、かんだたをごく楽にのぼらせてハッピーエンドにしたいです。その方がかんだたのくもに対する思いやりの心がむくわれてスッキリ終わって気持ちがいいです。

くもの糸が切れた原いんは、かんだたが後からのぼってくる人たちに、「おれの糸だぞ」と言って追いはらったことです。ひどいことをするな、と思ったけれど、自分がかんだたの立場だったら、同じように天国へ行くチャンスを一人じめしたいと思うはずです。かんだたのように口で言うことはしないけれど、心では同じことを思ってしまいます。でもきっと、口に出さなくてもそう思っただけで、おしゃか様は糸を切ってしまうのではないでしょうか。

人にはだれでも、よい心と悪い心があると思います。ごく悪人のかんだただって、くもの命を救う心がありました。でも、本当のピンチになった時でも人を思いやって行動することはとてもむずかしいと思います。心では何が正しくて、何が悪いことなのか知っているけれど、それを行動にうつすことはなかなかできません。ぼくもそれで失ぱいすることがよくあるのでかんだたの行動は理かいできます。

また、おしゃか様はかんだたを信じたのに、かんだたの自分勝手な行動を見て、残念な気持ちになったと思います。もしかしたら、地ごくなんか見なければよかった、と後かいしたかもしれません。地ごくにおちた罪人なんだからほうっておけばよかったのに、と思います。だけど、かんだたの心におくにあるよい心にひきつけられてしまったのでしょうか。結きょく、かんだたはよい心を持ち続けることはできなかったけれど、かんだたを信じたかったおしゃか様の気持ちはなんだかわかる気がします。

こうやって、かんだたとおしゃか様の立場に立って考えてみると、二人の行動になっとくできました。きっと作者は人の心をよくわかっているからわざと悲しい結末にしたのだなと思います。ハッピーエンドのお話ではなかったけれど、人の心について考えさせられるとてもインパクトのあるお話でした。

対象作品／やなせたかし著『何のために生まれてきたの？希望のありか』ＰＨＰ研究所

正義のヒーローとは

弘前大学教育学部附属小学校　林　大晴

弱い人でもかっこいい。その理由は、どれだけ弱くても、自分が傷つく事を覚悟すればだれだって相手を助ける事が出来るからです。

老若男女、だれもが知っている国民的ヒーローキャラクターの「アンパンマン」がそうです。なぜなら、自分の力が減る事が分かっていても、目の前の飢えた空腹の者に自分の顔であるあんパンをちぎって与える事が出来るからです。

この本の作者、やなせたかしさんは、戦争を体験した中で、一晩中眠れなかったり、どろの中を転げ回っていた事は、休む事で回復したけれど、空腹だけはたえられず、一番つらい思いをしたそうです。その経験から、悪者をたおすヒーローより、飢えで苦しむ人を助けるヒーローを作りたいと考えました。

やなせさんは、五十四才の時に、アンパンマンの元になる本を書きました。大人が子供目線で見たら、「顔をけずるのはざんこくだ」と言われました。それでも、大人にも子供にもみんなに愛されるヒーローを書き続けると、子供には人気が出ました。そして、子供向けの作品を作るために生まれてきたのかもしれないと気が付くまでの苦労や思いが書かれた本です。

以前、ニュースで、ふみ切りをわたろうとした人が、電車にひかれそうになって、その人を助けようとしたけいさつ官が亡くなってしまうという事がありました。ふみ切りをわたろうとした人が命の危険にさらされた時に、自らの危険を顧みず、助けずにはいられなかったのだと思います。これがやなせさんが考えている本当の正義なのです。もし、ぼくの目の前で命の危険にさらされた人がいたら、助けられるかどうか分かりません。その理由は、自分の身を守る事が出来ないのに、相手の事を助ける事が出来ないと思ったからです。

ぼくがこの本を手に取ったきっかけでもある、本の題名の、「何のために生まれてきたの？」という問い。この事について考えてみたいと思い、読んでみる事にしました。この答え

は、まだ職業についてないし、十年しか生きていないので今はまだ分かりませんでした。これから先、将来の夢である学校の先生になるために、自分の身の回りの整理整頓や、勉強をしっかりやって、だれかの役に立ちたいです。そして、何のために生まれてきたのかを考えられるような人間になりたいです。

小学校五年の部　第二席　――　対象作品／佐々木志穂美著『目がみえない耳もきこえないでもぼくは笑ってる』角川書店

苦しくても最後まで精一杯がんばる

弘前市立城西小学校　佐々木　理　子

この本を見つけて思ったことは、障がい児は、目がみえなくても、耳がきこえなくても、笑っているということです。

そして、私がこの本を読んでみようと思った理由は、あらすじと、最初の数ページで読んでみようと思ったからです。

この本は、ちょっと変わった兄弟の物語です。長男の洋平は、七万七千人に一人しか生まれない、とても重い病気をもっていて、弟の大は自閉症、すえっ子の航も、知的おくれのある自閉症がある。つまり、障がい児三兄弟が広島県の呉という町でくらす物語です。

私がこの本を読んでみて思ったことは、障がい者は、やさしさ、うれしいことがあるからこそがんばれるんだなということです。障がい者は、目がみえなくても、耳がきこえなくてもがんばれるのがすごいなと思います。

そして、この本を読んで考えたことは、障がい者はがまんできないこともあるけど、とってもがんばっているということです。障がい者は、なんにもできないわけではないし、私達にできないことを障がい者はできるかもしれない。たとえば洋平くんは、左側ののうがほぼないけど、右側ののうをつかう、芸術家になれるかもしれない。と洋平くんのお父さんは言っています。そうやって、前向きに考えることがすごいなぁと思います。

しかも、障がいがある三人は、いじめなどがあってもつらくても、がんばっていることがすごいなと思います。

洋平くんは、うまく呼吸ができない。でもがんばっている。

自分の力で呼吸ができなくても必死にがんばっている。わたしはその洋平くんの姿を想像するとすごいと感じ、がんばっているというのが伝わってきて、なみだが出ました。さらに私は考えました。障がい者の方ががんばり屋さんなのかもしれないと。

この世の中には生きたくても生きられない子もいるので、命をそまつにせずに、思っていなくても「死ね」なんて言ったらいけないと思います。

この本を読んで私が思ったことは、苦しくても、がんばろうということと、たとえ、結果が報われなくても、ゴールに向かって最後まで精一杯がんばるということです。洋平くんや大くん、航くんのように精一杯生きようと思います。

また、障がいのある子でも受け入れる、お父さん、お母さんがすごいと思います。見習いたいと思いました。

小学校五年の部　第三席

対象作品／サン・テグジュペリ著『愛蔵版星の王子さま』岩波書店

『星の王子さま』を読んで

弘前市立大成小学校　立田美月

表紙の王子さまの不思議な表情にひかれ、この本を読み始めました。

この本は、王子さまが、他の世界を見るために自分の星を出て、六つの小惑星、そして地球に来る話です。

いろいろな話が出てきて、理解をすることがむずかしいところや、話をしている人の気持ちがわからないところがたく山ありました。だから、私なりに考えながら、まるでなぞ解きをしているような気分でこの本を読んでいきました。特になぞ解きが多かったのは、地球の場面です。

王子さまは、自分の星が大好きで、特に自分の星のバラが世界一だと思っていました。しかし、地球にはたく山のバラがきれいにさいていたので、王子さまは自分の星のバラはつまらない物だったのかと大泣きしました。その時、耳がとがっているキツネが現れました。王子さまはキツネにいっしょに遊ぼうとさそいましたがキツネは、

「おれ、あんたと遊べないよ。飼いならされちゃいないんだ

から。」

とことわりました。王子さまは、キツネの言葉の意味が分かりませんでした。私も王子さまと同じく、キツネの言葉の意味が分かりませんでした。「飼いならす」とは「動物にえさを与えて人になつかせること」で、王子さまはキツネにえさを与えるわけではないからです。ところがキツネによると「飼いならす」とは「仲よくすること」だというのです。そこで私は、王子さまとキツネは初対面でまだ仲よしではなかったので、キツネは王子さまのさそいをことわったのだと考えました。ところが、この私の考えはまたちがったようです。次にキツネは、「仲よくする」とは「世界に一つしかない特別なそんざいになること」と説明したのです。私はまたまた考えました。もしかすると、キツネは「だれとでも」ではなく、「自分にとって特別な人」と遊びたかったのかもしれない。でも「特別」って何？

キツネは、王子さまと別れる時、「かんじんなことは目に見えないから心で見なくてはいけない」というひみつを王子さまに教えました。そこで私はもっと考えました。キツネが大切にしていることは「人や物を大切に思う心」かもしれない。だから、相手を大切に思う心をおたがいに持って遊びたかったのかもしれない。王子さまは、このひみつを教えてもらった後、自分の星のバラが大切な理由を考えました。「自分の星を大切に思う気持ちを持っていたら、地球のバラを見ても泣く必要はないよ。」とキツネのひみつにはげまされたからだと思います。

キツネさん、私のなぞ解きの答えは合っていますか？合っていなくても、私はあなたのように、友達を大切にする心を持って友達と接することをわすれませんね。

対象作品／漆原智良著『ぼくと戦争の物語』フレーベル館

小学校五年の部　佳作

命は一つだけ

弘前市立文京小学校　齋藤伊輝

ぼくは『ぼくと戦争の物語』という本を読みました。この本を選んだ理由は、この本が戦争のお話だからです。

この本は、四年生の心平が主人公の物語です。心平は勇気のある人です。そして心平は、戦争が始まるという理由でそかいをします。心平という少年の目線でえがかれる命のお話です。

ぼくが、この本を読んで、いちばん心に残ったところは、心平が自分のこきょうに一人でもどったところです。ぼくはこの部分を読んで、すごい勇気だなと思いました。

なぜなら、もしぼくが心平と同じような立場だったらと考えると、ぞくぞくし、いやな気持ちで、いっぱいになると思うからです。

戦争の状況が悪化すればするほど、少年の生活も変わります。兵隊に送る食料としてイナゴをつかまえる運動会。うまくできない心平はいじめられます。「勝つまでのしんぼう」という言葉があちこちからきこえてきます。

「なんでわるいことをしていないのに、がまんしなければならないんだ。」

さらに戦争がはげしくなると、男子は竹ヤリ訓練、女子はナギナタ訓練。人形を上手くついてほめられた友達の洋太の、「魚をつくのとは、わけがちがう！」

という言葉はぼくを悲しい気持ちにさせました。

戦争が終わって、連らくのとれない家族をさがしに東京にもどった心平。ところが自分の生活をしていた場所は全て焼け野原。「なにもない！」とつぶやく心平。

「戦争のためにそかいした。そのうえ家族・家屋すべての財産をうばわれてしまった。だからといってなげいていては前にすすめない、とも思った。」

「ほんとうは、みんなやさしいやつだったんだ。戦争が、競争、競争といじめる人間をつくっていたんだ。」

心平の一つ一つの言葉が重い。

もし今、自分が心平と同じ立場になったらどんな気持ちになるだろう。その前に同じように行動できるだろうか。家族と別れ、いろいろなことをがまんして、生きることをゆう先する生活。そして家族の死。

いろんなことが便利になって平和があたりまえの毎日。戦争なんてテレビやゲームの世界。想像することさえできない自分。正直この本を読んで、心平の本当の苦しさやつらさを想像することもむずかしかったです。

ぼくはこの本をよんで良かったと思いました。この本と出会わなければ、「戦争」というものが現実にはないものと思いこんでいたと思います。そして、戦争中、つらい思いをした人たちや、同じ年の小学生がいたことも想像できなかったと思います。

今年もお盆がやってきました。テレビでは原ばくのＶＴＲが流れています。ぼくはいつもとちがう気持ちで画面を見つめています。

対象作品／ダン・ブラウン著『天使と悪魔』角川書店

どんなことがあっても冷静に

弘前市立第三大成小学校　赤川伴弥

本との出会いは、図書室で読書感想文用の本を探していたときのことです。どの本にしようか探していて目に入ったのは、『天使と悪ま』という本でした。その本を手に取り、最初のページを読んでみるととてもおもしろい内容だったので、借りて読んでみようと思いました。

その気になる内容は、天国から研修にきた天使と、地ごくから成績不しんでおい出された悪まが、けい事のマンションにやってきたところから始まります。そこで殺人事件が起きてしまい、けい事がはん人あつかいされてしまいます。その事件を解決したいと考えた天使が、正反対の悪まとコンビを組んで事件を解決していくお話です。

ぼくは読んでいくうちに、はん人あつかいされてしまったけい事のことがとても心に残りました。なぜかというと、そのけい事は、たとえどんなことが自分にふりかかってきても、落ちこんだりせず冷静に考えて行動するからです。ぼくがもしけい事で同じ立場であったなら、あわててしまい冷静になれないと思います。だからぼくは、この吉原じょうすけけい事がとてもかっこいいと思いました。

一番心に残った場面は、十二番目の『現れた顔』です。その場面は、吉原けい事の心の強さが出た場面です。親しい人が殺人をしてしまったことを知ったとき、ふつうならショックをうけて落ちこむはずなのに、吉原けい事は、その悲しみをいっさい出さずに事件を解決していったからです。ぼくにはまねできません。でもこの場面から学んだことは、どんなことがあっても、あわてずに冷静でいた方がよいということです。吉原けい事のようにぼくも冷静な行動をしたいと思いました。

吉原けい事の行動は、自分の生活の中にもあると思います。何かむずかしい問題を解こうとしたとき、いくら考えても分からず、あせってしまうことがあります。それでも、吉原けい事のように落ちついて冷静に考えて解くと正解だったこともありました。ぼくは、この本から、落ちついて冷静に考え

て行動する大切さを学びました。これからも吉原けい事を見習って生活していきたいと思います。

小学校五年の部　佳作　――――――　対象作品／由井りょう子著『ぼくは満員電車で原爆を浴びた』小学館

これからも平和を願って

弘前市立東小学校　落合　さくら

この本は、爆心地付近で被爆し、きせき的に生き残った米澤鐵志さんの体験した話です。米澤さんは五十年以上、被爆体験の語りべを続けてきた方です。

米澤さんが小学一年生の時、太平洋戦争が始まりました。今までおやつとして食べていたキャラメルはなくなり、お弁当は、白いご飯に梅ぼしの日の丸弁当。バナナや砂とうもなくなりました。好きな食べ物をがまんしなくてはいけないことは、とてもつらいと思います。

八月六日、そ開先から広島の祖父母の家まで、母と一緒に荷物を取りに行くため、汽車に乗りました。その時、原爆が落とされ、米澤さんは電車内被爆者になってしまいました。汽車が動かなくなってしまったので歩いて移動しますが、その時、前を歩いている人が、髪の毛まで火がもえ移ったり、三角定規のような大きなガラスのはへんが背中にささっている人を見ました。助けてあげたいけど自分もその場にいたら、逃げることに必死になっていたと思います。それから激しいはき気におそわれる急性放射線障害の症状が出てとても苦しそうでした。のどがかわいて、川の水を飲もうとするとその水を飲んだ人たちがたくさんたおれてしまう様子を見て米澤さんは水を飲むのをがまんしました。のどがかわいている中で、たくさん歩かなくてはいけないので本当に苦しかったと思います。

八月十五日、戦争が終わりました。父が帰って来る、ふだんのくらしがもどってくると思ってほっとして涙を流した母を見て米澤さんもうれしくてたまらないようでした。私は戦争は負けてしまったけれど、家族みんなでまた元気にくらせるのでよかったと思います。

その後、米澤さんは、髪が抜けたり、高熱がでて、はき続

けていて、回虫が出てきたり、とても苦しそうでした。九月一日、母が亡くなりました。三十四才でした。十月九日には一番下の妹が二才になる前に亡くなってしまいました。私は、大切な家族を二人も失ってしまってとてもかわいそうだなと思いました。

米澤さんは生き残った理由をあとから資料を見て知りました。米澤さんが乗っていた電車は当時はめずらしい鋼鉄製だったので放射能をある程度防ぐことができました。また、電車は被爆したしゅん間、当時広島で一番高い建物の横にいました。このビルにさえぎられたおかげで直接熱線を浴びずやけどもせずにすんだということです。命は助かったが、髪が抜けたことで転校先の学校でからかわれたり、いやなことがあったと思います。米澤さんは苦しい思いをしたのに、学校でもいやなことをされて、なんてかわいそうだと思いました。今は日本では戦争はなく不自由なくくらせています。被爆者や亡くなった人たちのことを知り、この先も平和にくらせることを願っています。

出会いはすべてを変える

弘前大学教育学部附属小学校　葛西華那心

「成功か失敗どちらを選ぶか」もちろん成功を選ぶ。失敗はかっこ悪いし、成功はみんなからほめられ、認められるから嬉しい。そんな私の考えは、エディのおかげで立ち止まり、見直す機会になった。

「みんなはできて、自分だけができない」こんなつらいことはない。友だちといても、ひとりぼっちで自信もなくなる。先生や家族にも、あきれられてしかられる。もう農夫をやるしかないんだ。そんなエディを支えたのは、世界一がんばり屋さんのヘレンと絶対あきらめないベルさん。二人が「きみはかしこい子」とはげまし、信じて期待してくれたから、苦手な文字も暗記するまで取り組むことができた。大勢の人が言う事より、自分が信じる人の期待を裏切りたくない。弱音を吐きたくなる所をぐっと我まんするように変われた。

わたしは「マイ、ルール」を作って自分勝手に決めて、友だちから苦情を言われたり、先生や家族からしかられる事がある。自分では良いと思った事が自分勝手になってしまうらしい。しかられるとつらい。わたしはベルさんの「まずはできた事を喜ぶ。そして失敗はくよくよしない」という言葉になぐさめられた。自分で考え、行動した事は良いが、残念ながら正しい判断ではなかった。次は同じ誤りはしない。考え方で、失敗も次への新しいちょう戦へときり変わる。失敗を積み重ねることで、私は成長し続けていると気づいた。納得して、次に進む事は大切だ。

そして、私がこれから探したいと思った事は、途中で投げ出さずがんばり続けられるほど好きなものを見つけること。エディは本のさし絵だけではわからないから、書かれている文字を読みたかった。だから辞書を引く努力をした。絶対にわかってやると決意するものが私にはない。できない事を努力し続ける事は難しい。好きな事のためにがんばり続ける何かがほしいと思った。

でも私は根気が続かない。やはり、ひとりでやれる事には限界がある。つい無理と思ってしまう。自分の心が弱くなっ

た時に、ヘレンやベルさんのような友だちは大切だ。私は友だちにはめぐまれている。言葉で話さなくても、その人ががんばっている姿を見ると、私も気持ちが動く。し激をもらって自分でやろうと思った以上の力を出す事ができる。
私は失敗もそう悪い事ではないと気づいた。うまくいかない事や自分の弱い点を振り返って考える機会になるとわかった。そして、友だちと関わる中で、強くなったり成長したりしていくと教えられた。「まだがんばれる。もっとやれる。」と自分に言い聞かせながら成長していきたい。

小学校六年の部　第二席　――　対象作品／鎌田洋著『ディズニーそうじの神様が教えてくれたこと』ＳＢクリエイティブ

そうじとディズニーの魔法

弘前市立福村小学校　漆舘野乃

私は、五才の時初めてディズニーランドへ行きました。そのとき見た景色は、まるで夢の国のようでした。この夢の国を創り出しているのは、ミッキーやミニー、楽しいアトラクションだとずっと思っていました。
でも、この本を読んでから、清掃員の「キャスト」と呼ばれる人たちも、ゲストへ夢を与えていたんだな、と気づきました。
まず、チャック・ボヤージンという人物は、アメリカのディズニーランドのウォルト・ディズニーの理想である、「常にパークがきれいでなければならず、『何回そうじしたか』ではなく、常に一定の基準を維持しなければならない」を叶え、「そうじの神様」と呼ばれるようになったそうです。そのチャックさんは、新人キャストへの研修で、「この床に落ちたポップコーンを君たちは食べられるかい？」とキャストに質問しました。私は、「なんでこんなこときくの。」と思いました。すると、チャックさんは、「いいかい？僕はね、子供が床にポップコーンを落としても、ちゅうちょなく拾って食べられるくらい、床をきれいにして欲しいんだ。」と教えました。この言葉をきいて、私は、「なるほど。落としても食べられるくらいにきれいにしておけば、落としてしまった

子も、悲しまなくてもいいということか。」と感心しました。

私の通う学校では、縦割り班という全学年で構成されるグループがあります。その班でそうじや活動をしています。私は班長で、あいさつなどをしています。

教室をほうきではくときに、毎日ゴミや落とし物がたくさん出てくるので、「みんな、物落としすぎなんじゃない？」とか「きのうもそうじしたのに、またこんなにたくさんゴミが出てくる」など、いろいろ思いますが、チャックさんの言葉で、こんな言葉がありました。「ゲストがゴミを床に捨てるのは、捨ててもいいという環境を、キャストであるぼくたちが作っているからなんだ。」キャストを私にあてはめると、「ゴミを床に捨ててもいいという環境を、私たちが作っているからなんだ。」となるので、私は、みんながゴミを床に捨てられないくらいピカピカな教室を作りたいと思います。ピカピカできれいな所は、私だけでなく、他の人も、汚したくないと思います。

「キャスト」という仕事は、子供たちに夢を与える仕事です。チャックさんは、「自分自身が夢を持っていないと、人に夢を与えることはできないよ。」と言います。

私はまだ、将来の夢は決まっていませんが、「人の役に立てる仕事につきたい」と思っていました。でも、この本を読んでから、「人に夢を与えられる仕事につきたい」と思うようになりました。どんな仕事だとしても、周りの人が笑顔になると信じてがんばりたいです。

小学校六年の部　第三席　――　対象作品／こうやまのりお著『世の中への扉ピアノはともだち奇跡のピアニスト辻井伸行の秘密』講談社

可能性は無限大

弘前大学教育学部附属小学校　葛西心美

以前から、辻井伸行さんの名前、そして生まれつき目が見えないけれど、国際ピアノコンクールで優勝し、とても有名な人だということは知っていた。私は、この本に出会い、単純に、辻井さんは天才だと一言で言い表してはいけないと思った。

辻井さんの考え方や普段の生活は、健常者と何ら変わらな

いと言っていいほど不自由ではなく、とても充実している。失敗しても前向きにとらえて、力強い行動力がある。辻井さんの強い精神力は、いったいどこからくるのかと思った。

「人は大きな夢を持った時、お父さんやお母さんや家族をはじめ、色々な人の協力を得ないと、それを実現することはできない。それぞれの人が持っているエネルギーが溶け合って、一人の人間の夢がだんだん形となる。その時、大切なのは、夢を持った人の努力であり夢を達成しようとする純粋な心。」という部分が私の心に強くひびいてきた。この部分に大切な答えがつまっていた。

素晴らしい技術を身につけること。賞を手にすること。人からほめられること。辻井さんにとって、そうしたことが一番ではないのだ。「人を感動させたい。」という純粋な心と周りの人への感謝の心をとても大切にしていた。

私は、毎日の生活の中で目に入ってくるものは、当たり前で、一つ一つのものや色々な出来事を注意深く見たり感じたりしていなかったことに気付いた。

辻井さんは、親子で心の眼で、四季折々の風景、ヨハン・シュトラウスの銅像やオペラやミュージカルのコンサートなど、たくさんの冒険や体験を通して豊かな心を育んだ。

私は、改めて自分自身が幸せだということを学んだ。幼いころから習っているピアノ。大好きな陸上競技。いつも親身になって指導してくださる先生やいつも応援し、協力してくれる家族や友達がいる。感謝の気持ちや謙虚(けんきょ)さ、礼儀、明るさを忘れずに前向きで頑張りたいと思った。

あきらめてしまったら可能性はゼロ。しかし、自分を信じて夢に向かって努力し続けたら可能性は無限大。困難に打ち勝って、たくさんのことにチャレンジし続けたい。

小学校六年の部　佳作

〝考動〟について

弘前大学教育学部附属小学校　福村悠人

『弱くても勝てます』という、ぼくが思っている常識とは

――対象作品／高橋秀実著『弱くても勝てます開成高校野球部のセオリー』新潮社

まるで正反対なことを言う題名に疑問を持ったことが、この

本を選んだ理由です。

この本の内容は、東大合格者数日本一の開成高校の野球部のことを書いたノンフィクションです。屋外練習がわずか週一日の超弱小校の監督と選手たちの考えが書かれています。

この本を読んで一番心に残ったところは、二年生のサードを守っている藤田君が、

「大事なのは、反省をしないことですね。」

と言うところです。さらに、

「反省したりすると、かえってエラーが出る。エラーしてもいいと思うとエラーをしない。」

とも言っています。

ぼくは、剣道を習っています。剣道の試合は二分間です。その短い時間の中でも、失敗をするとパニックになったり、反省で頭がいっぱいになってしまい、なかなか良い結果が出せません。藤田君のような前向きな姿勢が、ぼくには足りていないと思いました。ちょっとやそっとの事では動じない強い心を持てるようになりたいです。

もう一つ心に残った場面があります。部でミーティングをした時に、監督がチームの勝てない理由を、

「プライドの欠如だ。」

と言ったところです。ぼくにも試合で当たると、必ずといってよいほど負けてしまう相手がいます。ぼくは、トーナメント表を見て、

「うわぁ、やだなぁ。どうせ負ける。」

と思ってばかりいました。しかし、毎日のように練習を積み重ねてがんばっているという自分なりのプライドを持つことの大切さに気付きました。

『弱くても勝てます』というのは、全員が勝ちにこだわることを忘れずに、野球に取り組んでいるからです。一人ひとりが、自分自身の弱点や下手であることを自覚して、努力しています。監督から言われたことだけを聞いて、ただ体を動かす野球をしていません。監督の言葉をヒントとして受け止めて、一人ひとりが自分でやるべきことを考えて、工夫しながら、一生けん命に練習に取り組んでいます。ぼくも、剣道の先生に、

「練習で工夫をしないで、どうするんだ。」

と、よく言われます。考えて練習に取り組む大切さを改めて思いました。

この本を読んで、担任の先生がくり返し言っている「考動」という言葉を思い出しました。大好きな剣道だけではなく、学校や家でも、落ち着いて自分で考えて、工夫しながら行動することを心に決めました。がんばっていきたいです。

天使が教えてくれたこと

弘前市立第三大成小学校　大湯日花里

私が今回、小学校最後の読書感想文として選んだのは、宮川ひろさんの『天使のいる教室』です。この本は私が二～三年生くらいの時に、国語の教科書の一番後ろのページで紹介されていたものです。あらすじを読んで、「読んでみたいな」と思っていました。運よく図書室で見つけて借りたものです。

この本は、小児がんを患っているあきこちゃんと、砂糖パンが大好きな美人のサトパン先生率いる一年二組の子供たち、そして子供たちの成長をかげから見守る人形の水木哲平くんのあたたかく、楽しく、そして切ない八ヵ月間のお話です。実はこの話は実話をもとにして描かれたそうで、読み終えた時に「こんな悲しい物語が私の全く知らないところで本当に起きていたんだな…」と思いました。

私が特に心に残った場面は二つあります。まず一つ目は、サトパン先生が、あきこちゃんのクラスの担任になる！と初めて知った日のことです。今までとはちがう状況のクラスを持つことに不安を感じる先生に夫が「奇跡っていうのは、おこるんだよ。教室が楽しければ、奇跡はおこるさ。おこすんだよ。」と励ましました。奇跡なんか絶対におこるわけない…と落ちこんだり悩んだりする前に、まずはまわりを明るくして、頑張ればいつだって誰にだって奇跡は生まれるんだなと深く思いました。二つ目は、カップラーメンのところです。お母さんがあきこちゃんのラーメンをつくるのに失敗してしまい、あきこちゃんもお母さんも大泣きしてしまったのです。私はあきこちゃんはラーメンづくりに失敗したことに泣いているのではなくて、日々の辛い治療や副作用、学校に行けない悲しみに耐えきれなくて泣いちゃったんだな…と思います。優しいあきこちゃんはずっとガマンしてて、泣けるタイミングが欲しかったんだと思います。お母さんも、娘の辛そうなところを毎日見ています。それでも心配させないように泣かないなんて、心が強いし、とっても娘思いのお母さんなんだなと思います。

あきこちゃんは、十二月十日、午後九時にお母さんのうで

対象作品／宮川ひろ著『天使のいる教室』童心社

の中で「あっこ星」となって天にのぼっていきました。私はこの本を読んで、「悲しい」という気持ちだけではなく、「あたたかい」気持ちになれました。一年二組のやさしい思い、サトパン先生の子供への愛、あきこちゃんの「みんなといっしょにいたい！」という気持ち…本当にこの本は深くて、読み終わった後にじんわり感動するものでした。中の文章は、全て水木哲平くんという人形目線で書かれていて、めずらしいけれど分かりやすく、より心に響きました。人形の気持ちも分かります。

私もあきこちゃんやそのまわりの人たちのように、あきらめない気持ちや、人を思いやる気持ちをもっともっと深めていきたいです。

対象作品／小山内美江子著『アンネ・フランク物語』講談社

小学校六年の部　佳作

『アンネ・フランク物語』を読んで

弘前市立城東小学校
荻野桜子

七十三年前、広島・長崎に原子ばくだんが落とされた。しかし戦争に苦しんだのは日本だけではない。そこで私はこの一冊の本を読んだ。

一九四二年六月十二日、アンネ・フランクは十三歳のたん生日をむかえた。プレゼントのつつみをあけると、チェックもようの日記帳がはいっていた。アンネはその日記帳を強くだきしめた。フランク家はドイツ国民でもあったがユダヤ人だった。ユダヤ教という古くから伝わる宗教の信者である。ドイツ国民はみな平等にくらしていた。しかし一九三三年の選挙でアドルフ・ヒトラーが首相にえらばれる。そこからアンネたちの人生は大きく変わる。ユダヤ人にたいする差別と迫害が始まったのだ。そしてついにユダヤ人が強制収容所に送り込まれるようになった。そこはひどいところであった。食べ物もろくに食べられない、一日中はたらかされる。最悪の場合、殺されてしまう。そこでフランク家は、かくれ家にかくれて、ひっそりとくらすことになったのだ。だが見つかってしまい、アンネは強制収容所に送られ亡くなってしまう。

十五歳九か月という短い人生と戦争というあやまちを教え

てくれたのはアンネがかくれ家でかき続けた一冊の日記帳だった。アンネは常に前向きに、希望にみちあふれていた。

私はもし自分がこんなひさんな生活を送ったら…と考える時がある。もちろん毎日泣いて時には自ら命を絶とうと考えてしまうかもしれない。だがアンネは、ものすごく幸せそうだった。平和をいつも願い続けていた。「人間は本当はいい人だと信じます。」という言葉に心を打たれた。私はこの『アンネ・フランク物語』を読んで、今の自分がどれだけ幸せなのか考えるようになった。私は戦争を経験したことがないから、それがどんなに恐ろしいものかはわからない。だが、今も戦争は続いている。夢をもった小さな子どもまでかんたんに殺されてしまうのだ。アンネにも夢があった。この本を読めばだれもがアンネをかわいそうと思うだろう。アンネが日記にかいた言葉一つ一つにむねがしめつけられる。アンネの日記は戦争のいたましさを伝えていた。「なぜ人間はなかよくくらせないのだろう」「なぜばくだんや飛行機についやすお金はあって貧しい人々のためのお金はないのだろう」それとともにアンネの幸せな夢もつづられていた。私はそのアンネの夢と戦争というあやまちを伝えるバトンを私たちがつなげていかないといけないと感じた。

夢をかくれ家のなかで日記帳につづっていたアンネ。常に前を向いていたアンネ。この短い十五年九か月という人生は、私たちが伝えていかなければならない。この戦争が続く世界を私たちが変えなければいけないとこの『アンネ・フランク物語』を読んで改めて感じた。

小学校六年の部　佳作

対象作品／富山和子著『森は生きている（自然と人間）』講談社

改めて気づいた森林の大切さ

弘前市立福村小学校　造田紗央音

私は国語の「森林のはたらきと健康」という説明文を学習して、森林のにおいで心身が健康になるはたらきに感心し、もっと知りたいと思った。すると、関連した本の紹介ページに『森は生きている』という本がのっていて、興味を持った

のでその本を読むことにした。すると、その本は、森林の持つ様々なはたらきをくわしく説明していて、自然を守るということはどのようなことかを、考えさせられる本だった。

この本を読んで、私はみなさんに森林の無い暮らしを想像してほしいと思った。森林からのおくりものといえば、みなさんは、木、すなわち「木材」を思い浮かべるだろう。だが、私はおどろいた。紙、木、水、土、ゴムなども全て森林からのおくりものだった。

その中でも私は、特に土のしてくれるはたらきに感心した。土がないと木が育たない、木がないと森林はできない。そんな大切な土は三億五千万年もの大昔に原始植物の根が岩と岩とをつなぎとめて芽が出たことが始まりとなっていた。そのくり返しで土は厚くなっていったといわれている。私は、この本を読み始めた時、ただ森林に感謝したいと思った。だが、この本を読み終わった時は、その森林を作る大切な土を作り出してくれた原始植物にも感謝したいと思うようになった。

もう一つ印象的だったところがある。それは、人々が苦心しながら砂丘に木を植えていたところだ。砂丘はたくさんの砂が降ってくるので、暮らしたり、畑を作って農業をしたり出来なかった。そのため、海辺の砂を防ぐ海岸林を植え、国土を増やそうとしたのだ。しかし何度挑戦しても育たなかった。それでも人々は必死に木を植え、長い年月をかけてそれを実現させた。このことに私は感動した。私も一度や二度失敗してもあきらめないで、根気よく続けてみようと思った。そうすれば、いつかは努力が実る時が来るのではないかと考えるようになった。

筆者の富山和子さんはこの本を通して、森林は人間に無くてはならないもので、木そのものだけではなく、水、火、土も作り出していることや、様々なはたらきをしてくれることを伝えてくれた。だから、今わたしたちが森林を守ることは、いつか私たちの暮らしを守ることになるのだと思った。

私は、この夏もキャンプに行った。森林の中で過ごしたり、畑で育った野菜を収穫させてもらったりした。炭を使ってバーベキューもした。森林のありがたさに改めて気付かされた。

この大切な森林を無くさないために、割りばしなど、木で出来たものを大切にしたり、水や土を汚さないなど身近な事から気を付けていきたいと思う。

中学校 一年 二年 三年の部

対象作品／小手鞠るい著『ある晴れた夏の朝』偕成社

『ある晴れた夏の朝』

弘前市立第一中学校　鎌田莉央

「安らかに眠って下さい　過ちは　繰返しませぬから」

これは、広島にある慰霊碑に刻まれた被爆者へのメッセージです。この文章を読んだ時、私は過ちを犯したのは日本だと思いましたが、これは人類が犯した過ちのことでした。

この本は、広島・長崎への原爆投下は必要だったのかということについて、否定派と肯定派にわかれてディベートをするという話です。私は否定派でした。広島の原爆で亡くなった人は大勢います。後遺症の人もいます。戦争が続いていたにしてもそこまでする必要はなかったのではないかと思いました。さらに、アメリカが人種差別をしていたことや、人体実験のために原爆を落としたかもしれないということを知り、許せない気持ちが強くなっていきました。

しかし、それとともに日本が犯したこともわかりました。中国に一方的に攻め込み、罪のない中国人を殺した南京虐殺、ユダヤ人を絶滅させようとしていたドイツと同盟を組んでいたこと、そのドイツが降伏しても戦争をやめなかったことなどを知り、原爆は必要だったのかもしれないという意見が出るのもわかる気がしてきました。わたしは、どうすれば過ちが繰り返されずに平和を創造できるのかを考えました。その時に広島の慰霊碑に刻まれた文章が本文の中に出てきました。過ちを犯したのが誰なのか。その主語が、アメリカでも日本でもなく人類ということがわかった時に、おたがいに自分たちの犯した過ちを認めなければならないと思いました。

そこで、アメリカの人はどう思っているのかと思い、調べてみました。原爆を開発、投下し撮影した、ハロルド・アグニュー博士と被爆者とが対話をした動画をみつけました。アグニュー博士は、「私は謝らない。」と言っていました。それを聞いて、原爆投下は正しいと思っている人もいるとわかりました。私もアメリカ人だったら、そのように考えていたかもしれません。でも、この本に出てくる原爆肯定派だったナオミは「どんな言い訳が成り立とうとも、広島と長崎への原爆投下は許されざる行為だったと思う。」と言っていて、私

は、この言葉に強く胸を打たれました。本当にそのとおりだと思います。日本も同じことだと思います。どんな言い訳があっても、罪のない人々の所に一方的に攻め込むというのは決して許されない行為だと思います。やはり、日本もアメリカも大きな過ちを犯したと思います。それを二度と繰り返さないようにするには、自分たちの罪を認め、一人一人が亡くなった人のことを忘れずにいることが平和を創造する第一歩になると思います。

今年の八月六日、九日も、ニュースでたくさんの原爆の話を聞きました。平和の灯や慰霊碑などからは平和への強い願いを感じました。それから原爆で家族を亡くした人や、被爆した人の話を聞きました。この本の題名の、「ある晴れた夏の朝」とは、広島・長崎に原爆が落とされた日のことです。その日は、普段の私たちと同じ朝だったのです。そこに、原爆が落とされ、大勢の方が亡くなりました。

ナオミが最後に言った「私も平和を創造する一員でいたい。」という言葉、私が平和を創造するためにできることはまだわかりませんが、私も平和を創造する一員でいたいです。

中学校一年の部　第二席

対象作品／芥川龍之介著『羅生門』新潮社

善と悪の選択

弘前大学教育学部附属中学校　齋藤舞衣

『羅生門』は、天災が繰り返されすっかり荒廃してしまった平安時代の京都を舞台に、職を失い行くあてが無く途方に暮れた一人の下人の話である。生きる為に盗人になろうとするが、なかなか悪の道へ踏み切れず悶々としている時に、楼の内で死人から髪の毛を抜く、奇怪な老婆に出会う。老婆の、人として嫌悪をもよおす行いを目の当たりにし、一旦は正義を取り戻す下人だが、生きる為に仕方が無いことと自分の悪事を正当化し開き直る老婆に後押しされたかのように、遂に道を踏み外す物語である。

正義や善の為に死を選ぶか、生きる為に悪に手を染めるか――下人は後者を選んだ。私が下人に対し、お前の正義感なんて所詮その程度のものかと嘲笑えるのも、この選択肢が今

自分の目の前に無いからである。万一この問題に直面したら、おそらく私は、「未練なく前者を選び、正しい事の為に命を捨てる」などということはできず、都合の良い言い訳を作るだろう。

幸せで不自由の無い生活を送っている時には、人は誰でも善人でいられる。今の私もそうだ。「衣食足りて礼節を知る」という言葉があるが、物語の下人や老婆だって、あのような状況にいなければ悪の道に走ることはなかっただろう。

人の本質は窮地にたった時に表れるという。生か死かという究極の選択を迫られた時、一体どれだけの人が「人としての正しい道」を決断出来るのだろうか。はっきりと「命が危ういとしても人として正しい選択をします」と言いきれない今の自分を考える。すると、自分の中の善悪の基準や疑うことを無く当然だと思っていた正義感が危なっかしく思えてくる。

だからといって、いざそのような立場になっても悪いことを平然とやれる程の図々しさもまた今の私には無い。下人もそうだったように必ず心に葛藤が生まれる。悪いとわかっているけれど背に腹は代えられない。だから自分を納得させる理由が欲しい。そういって一生懸命頭を悩ませる。

考えてみると私の日常にも弱い自分を正当化しようとする時はある。

例えば、いじめられているクラスメイトを見て見ぬふりした時。だって止めたら自分もいじめられるかもしれないから等と言い訳をして自分の正当性を主張する時がある。心では正しくないことだと解っていても認めたくないのだ。悪いことを迷いなく行うことは意外にも気持ちが悪く、やはり人としての良心との葛藤があるからかも知れない。最後は決まって自分勝手な屁理屈を言って自分を見捨てた人と思われ、その人を更に傷つけてしまうのだが、それでも謝罪を混ぜた言い訳をする。物語の下人も善と悪の境目を行き来していたが、自分が生きる為に悪事を行う。だから自分は悪くないと老婆の言葉を自分の悪の言い訳にし、正当化しているように見える。私の話と下人の話では事の重大さが全く違うが、大なり小なり私たちの身近でも似たようなことは繰り返されている。

しかしどんな言い訳をしても行った悪事は消える訳では無く、どこまで行っても悪として残る。私がいじめを見て見ぬふりをした時のように言い訳は自分を守るための自分勝手な正義だ。老婆の衣をはいだ下人は生きる為にと称してその自分勝手な正義を振りかざした。

羅生門という作品は人のエゴイズムを描いた作品だと書店の紹介文にあった。エゴイズム――利己主義という意味らしいが、私たちの周りにはエゴが溢れている。自分のことしか考えない身勝手な人は多くいる。例を挙げると、被災して誰もいなくなった家に下人と似たような理由で盗みに入る者も例に入るだろう。私自身の中にもそんな部分が無いとは言えない。普段はその部分を隠して穏やかに秩序ある生活を過ご

しているが、一皮むけばどうなるかわからない。私たちの将来に待ち受ける様々な選択に対し、どこまで自分の良心を保てるか葛藤する事が出て来ることは多いだろう。これは人に与えられた永遠の課題だ。私はまだ子供だが、生きるということは自分が思うより大変なことかも知れない。今の自分が出来るのは、少しでも自分の考える善や正義が揺るがないよう、自分の中に住む利己主義と闘い続けることだ。

下人は悪の道に走ったがその道だって楽な道とは思えない。出来ることなら、同じ苦しさでも善の道での苦労を選択できる人間でありたい。

対象作品／坂木司著『和菓子のアン』光文社

中学校一年の部　第三席

和菓子、洋菓子、はなやかなのは？

弘前大学教育学部附属中学校

小島わこ

「ぱっとしねえんだよな、和菓子ってのはよ」。主人公がはたらく和菓子屋に来た酔っぱらいの男が言った言葉。私はこの場面を読みながら、接客をしている主人公と同じように、ムッとした気持ちになった。

頭の中で、和菓子派の私と洋菓子派の私が討論を始めた。洋菓子は見た目もぱっとはなやかだし、クリームやチョコなどたくさんの味や種類がある。しかしそれに対して和菓子は洋菓子ほどはなやかでもなく、味といっても全部とはいわないがほとんどがあんこのイメージ。洋菓子が有利だ。確かに私も和菓子は好きだが、洋菓子と比べてしまうと地味なところがあると感じていた。

しかしそれは「和菓子は地味」という固定観念にとらわれ、和菓子のはなやかさを知ろうともしなかったからだろう。この本を読んで、洋菓子に負けないはなやかさ、バリエーションの豊富さ、そしてなんといっても和菓子の名前の美しさにおどろかされた。

主人公の梅本杏子は、デパ地下のみつ屋という和菓子屋でアルバイトをしている。私の心に残った場面は、地下食品フロアへ広報からお知らせがあって、「今まで秋といえば食欲の秋でごってりとしたメニューで売っていただいていたが、

今年は量より質、お得感より特別感をキーワードにメニューを組み立てていただきたい。」店舗側の方はメニューが決まり次第、フロア長に提出して下さい、と言われた後の場面だ。

みつ屋の店長は秋のフェアにおはぎを使うことにしたが、広報の女性が「おはぎなんて陰気でもっさりしてるわ。もっとはなやかな生菓子とかに変更してくれない？」と言うのだ。杏子が悔しい思いで話を聞いていると、みつ屋に来ていた和菓子職人が広報の女性に声をかけた。

「おはぎくらい面白い菓子なんて、なかなかないぞ。おはぎは名前で七変化するんだ。」

そう言って話し始める。まず春ならばぼた餅、秋ならおはぎ。この二つは同じものだが、ぼた餅があんこだけなのに対し、おはぎはきな粉やゴマをつけたりする。おはぎは半搗きの状態で、搗かずに作るからつきしらず、それに月をあてはめ「月知らず」、月が見えない方角で「北窓」。こんな調子で七つの名前を説明するのだ。

私は初め、広報の女性の言うことはわからなくもなかった。おはぎなんてお彼岸ぽいし、もっと他にはなやかなものがあるはずだ。しかしこの場面を読んで、おはぎはなんておもしろいお菓子だろうと思った。そして、同じものに七つもの名前をつけられる日本人の頭のやわらかさに感心した。

店長はその説明のあとに、

「お菓子の名前って、駄洒落とか言葉あそびみたいなものも多いんですよね。そういうのって、一つの文化だと思うんです。」

こう言った。こうして、おはぎを使うことを認められたのだ。

この本の中には他にも、いろいろなお菓子の名前が登場する。例えば「おとし文」というお菓子。「巻いた葉とそれにとまる露を模して」いる。そしてこの「おとし文」という名前は、「こういった形に葉を落とす虫の仕業を見た人が、まるで紙を巻いて落としてある文のようだと感じたことから名づけられたお菓子」ということだ。こういったおもしろいお菓子の名前がたくさんでてくる。

お菓子の名前は一つの文化。私はあらためて、日本語はすばらしいなと思った。

この本を読んで、私の中の「和菓子は地味」なんて固定観念はどこかへいってしまった。

「餅もあればどら焼きみたいなふわふわの生地もあるし、かりかりのかりんとうだってある」。味も季節によって「梅とか柚子とか柿とか、色んなフルーツが使われてる。」バリエーションは決して洋菓子に負けていない。それに和菓子は「名前」まで美しいのだ。私は今までよりも和菓子が好きになったが、もちろん洋菓子がきらいなわけではない。どちらにもそれぞれの良さがある。ただ、前までの私のように「和菓子は地味」だと思っている人もいるだろうから、そんな人にも和菓子のはなやかさが伝わるといいなと思う。

対象作品／三浦綾子著『塩狩峠』新潮社

生かされ生きぬくこと

弘前大学教育学部附属中学校　永井嘉泰

僕は、三浦綾子さんの塩狩峠という本を読みました。この本を選んだ一つの理由は先生の薦めがあったからです。もう一つの理由は祖母の家に三浦綾子さんの本が沢山あって、三浦綾子さんの魅力はなんだろうか、どんなことを書く人なのかと気になったからです。

この本の主人公である信夫は、幼いころから、キリスト教徒がきらいな祖母と暮らしていました。しかし、大人になるにつれて、家族、友達、キリスト信者など様々な人との関わりによって、キリスト教に心を留めるようになります。そしてある日、信夫の乗っていた列車が塩狩峠にさしかかった時、列車の最後尾が離れ暴走し始めます。ブレーキをかけたが列車は止まらず、ついには信夫が自ら線路に飛びこみ乗客全員を救ったというお話です。

ある日、信夫の祖母は脳溢血（のういっけつ）で亡くなってしまいます。そのあと信夫の祖母に亡くなったと聞かされていた母と妹が家へ帰ってきます。時が過ぎ信夫の父も亡くなってしまいます。父の遺書にはキリスト教式で葬式を行ってほしいと書いてあります。葬式へ来た人はキリスト教式で行うなら帰ると言って帰りそうになりましたが、遺書を読んで理解し、参加する人もいました。そして信夫は両親がキリスト教徒なら悪い宗教ではないと思いキリスト教に興味を持ち始めます。

僕はまだ宗教のことはよくわかりません。塩狩峠を読んだ後に、母が言いました。僕の祖母はクリスチャンだったそうです。僕が生まれて半年後に六十四歳で亡くなったそうです。僕には祖母の記憶はありません。とてもよく働き、病気に縁のない元気な人で体に不調が出た時、頑固として病院に行くのを拒み続けた結果、病院に行った時は癌が全身にまわり余命数日といわれたそうです。周りはみな、あまりの急な出来事に受け入れられなかったそうです。「人は簡単には死なない。死ぬのは怖くない。いつ死んでも後悔はない。」と口癖だった祖母は余命をはね飛ばし数ヶ月入院生活を楽しんでいました。でも病気は決して良くなることはなく、日に日に衰

弱していき、死に対する不安と恐怖、愛する人たちと別れる寂しさと悲しみ、みんな心配して病院に行くのを薦めていたのに、行かなかった後悔と反省、さまざまな感情が浮かんでは消え、消えては浮かぶ日々に変わったそうです。

その時、若い頃から教会へ遊びに行っていた祖母は病院で家族、親戚、信者参列で洗礼を受け、クリスチャンになったそうです。信仰心が不安や恐怖、悲しみから解き放してくれたのかなと僕は思いました。母の実家は仏教です。クリスチャンの人はいません。祖母はあまり仏教を好きではなかったらしく、洗礼を受ける前から、「自分が死んだら暗くて地味なお経はやめて。戒名はいらないから。」と言っていたそうです。僕はなんとなく信夫の母と信夫の祖母の関係がわかった気がします。そして、実家に三浦綾子さんの本が沢山あるのも少し理解できた気がします。癌とわかった時祖母は周りを悲しませないようにと、頑張っていましたが介護に疲れているみんなを察して亡くなったそうです。葬儀は親族のみ仏教で行い戒名もついています。そのあとキリスト教式で一般の人たちに献花してもらったそうです。

人はなぜ生きて、なぜ死ぬのだろう。キリスト教も仏教も、教えは違うけれど、自分のために生きるのではなく、誰かのために生き抜くこと。誰かのために生かされていることは共通しているような気がします。

最後に「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにてあらん、もし死なば、多くの果(み)を結ぶべし。」この本の最初に書いてあった聖書の一文です。一粒の麦が地に落ちます。落ちた麦は腐敗してしまいますが、その麦が落ちることは無駄ではなく、その麦によって、いくつもの実を結ぶこととなるという聖書の教えを貫いた、信夫。愛する婚約者が待つ地に向かう途中で、信夫の乗った客車が離れて逆走したとき、瞬時に自分の体で車両を止めることが出来ると判断して信夫は汽車の下敷きになり、沢山の乗客の命のために犠牲死しました。婚約者、母、妹の顔が大きく目に浮かんだ一瞬、気持ちをふり払って起こした行動は間違いではなかったと思います。信夫が入信後、毎年遺言状を改め肌身離さず持ち歩いていたのは、いつでもイエス様と共に、全てのことに感謝して生きていたからだと思います。

人間は、生かし生かされているのだろうと思う作品でした。とても奥が深く年を重ねるごとに受ける感情が違うような気がします。また何年かしたら読み返してみたいです。

小さなつながりの大きな世界

弘前大学教育学部附属中学校　葛葉小雪

「タマゾン川ってなんだ？外国にあるのかな？」題名からこれは外国の話だと思った。しかし、ちがった。これは国内の川に関する話だ。他人事ではないぞ。

タマゾン川とはアマゾンの魚がたくさんとれた多摩川に筆者が名付けた名前だ。食用やペットとして外国からつれてこられた魚たちは人間の勝手な都合で川に捨てられるのだ。

このような外来種は在来種が長い年月をかけてつくってきた生態系をこわしてしまう。在来種を守るには外来種を殺すという選択肢しかないのだろうか？いいや、筆者はおさかなポストというものをつくった。それは飼えなくなった魚などを、みんな生けすの中に入れて飼育して、そして里親が見つかったらその人にわたすというシステムだ。こんな発想、どこからわき出てくるのだろうか。おさかなさんへの愛からやってくるのだろうか。

外来種のこと以外にも多摩川には問題がある。高度経済成長期には家庭から出る排水を川にそのまま流していた。多摩川は死の川と言われるほどくさく、きたなかった。うでを突っこむとねっとりとした泡がうでの毛にからみつくぐらい……。そう。筆者はなんと死の川にうでを突っこんだのだ。たしかにねっとりした泡が浮いている川は嫌だ。だがそれよりそんな川に手を突っこむ筆者の方が衝撃的だった。さらにその川に住むアユもすごくまずいのだ。洗剤とシャンプーの香りが鼻を抜けていくぐらい……。そう。筆者はなんと死の川に住んでいるアユを食べたのだ。たしかにかじったしゅん間洗剤の香りがするアユなんて嫌だ。だがそれよりそんな川に住んでいる魚を食べる筆者の方が衝撃的だった。

今の多摩川は、人が泳げるぐらいきれいになったのだ。下水処理場で下水をきれいにし川へ流すのだ。一見きたないと感じてしまうがとてもきれいなのだ。さらに、そのきれいになった水には水中プランクトンのエサであるチッソとリンという有機物が入っているのだ。これで魚の数も増える。

これだけでは終わらない。死の川問題が解決したがまた問

題が起こる。現代のくらしではお湯を大量に使う。だから、下水処理場で処理される水も温かくなり、川の水温が上がる。川の水温が上がるとどうなるのか。外来魚が暮らしやすい環境になる。アユが多くなりすぎてバランスを保てない。アユの産卵の時期がおくれ、小型化してしまう。下水処理場は停電が起きると何もできなくなる。

解決したと思えば次から次と問題が出てくる。いくら環境が変わるから、といっても、困ってしまう。ほんの少しの出来事がつながってつながって——大きな事件になる。だから予想して大事件をくい止めるのはむずかしいだろう。でも、やることはやるべきだ。たとえばテレビなどで地球温暖化の話をしていたから、少し節電してみよう、とか、ごみの分別ってあまりちゃんとやってなかったから少しやってみよう、とか。そしてもしも大事件が起きたら、今後どうなるんだろうとただ見てないで今やるべきことを考え、実行しないといけないのだと思う。死の川にうでを突っこんで、そこに住むアユを食べた筆者。そんな筆者の願いは、きっと知恵を出して問題を解決しながら、いつか生態系をもどすことだろう。筆者の大きな思いやりに、地球の未来について考えながら、この先の人生を歩んでこたえたい、と考えている。

対象作品／重松清著『また次の春へ』文藝春秋

中学校一年の部　佳作

私も『また次の春へ』

弘前大学教育学部附属中学校　三上玲央

私は小学校一年の十二月、一緒に暮らしていた祖父をすい臓ガンで亡くした。まだその時は悲しいけれど実感がわかなかった。母方の祖父なので母は私以上に苦しんでいたのではないか、とは多少考えていた。祖父は私のことを育ててくれているような、父親が二人いる様な感覚さえあった人だ。とてもまめな祖父は、祖母も母も毎日疲れてしまう程の気のつく性格だったから、子である母はよくぼやいていたものだ。孫の私からみても親子というもののリアルな姿を、面白いだの冷や冷やするだのと遠目から感じて、私は母に小一ながら「おつかれさま」と言ったことがあるらしい。これは後々高

学年になった頃、祖父の思い出話をしていた時に、母が教えてくれた話だ。我ながら、生意気だった。

その母も自身が中学一年の頃には、父方の祖母を亡くす経験があったと聞いている。私とすっかり同じじゃないか。私はおどろいた。私が祖父に育てられていると感じる程の感覚を、母も子供の頃に感じていたのだった。とても近い存在であったとしみじみ語る母を見ていると、私も私の母も、親にだけではなくとても可愛がられ、幸せな時間を与えてもらったんだと気付く。同時に、幸せで大切な思い出を残してくれたことにも気付いた。写真でもなく動画でもない、心の中に、記憶の中に。

亡くなったのは冬だから、とても寒かったのを今でも覚えている。三才だった私の弟が、斎場で大泣きしたのを覚えている。母が

「じいじにはもう会えなくなってしまうからさみしいけれど、元気に頑張っていこうね。」と話した。三才の子供にむかってそんなにはっきり伝えてしまって良いのか、ちゃんと理解できると思って話しているのだろうか、疑問だった。でも、それを聞いた弟は大泣きしたのだ。きっと分かったんだ、と感じた。私だって泣きたかった。年老いていたって父親のようだった。私の父親は仕事の都合で普段は家にいない。大型連休の時だけ帰ってくる。そのさみしさもあってか、幼いっていいなあ、と感じた日だったことは忘れられない。

その前の年、東日本大震災があった。今だに、テレビで流れる映像やその時を語る番組は、私の心をしめつける。大きな被害のあったところに知り合いがいた訳ではないが、本当の恐怖というものはもっと違っていたことに年々気付かされる。復興に何も役に立っていないし、自分のことで精一杯の自分がいる。家族みんな、まだまだ実感できていないのかも知れないと思うと、申し訳なさもある。ただ実際母はずっと体調がすぐれないと言っていたし、父も仕事が福島だった時には悲しい光景がまだ残っていて心が痛いと言う。自分の中できちんと消化できない悲しみを大人でも子供でも、日本でも世界でもかかえている様に思う。良いことも悪いことも人の心と記憶に残る。それを大切にしていこうと改めて強く思う。でも、すれちがった人はとても悲しい思いをして、今も苦しみ過ごしているかもしれない。手を差し伸べることができない。それがまた、悲しい。

「今から何ができる?」「なりたいものは何?」「将来に何をつなげたい?」「そのための進学先は?」なんてことばかりの毎日だ。勉強量が足りない、課題を終えられない、自分の時間が作れない……とか、不満ばかり。良いことと言えば、どこの何がおいしいとか、友達と遊んで楽しかったとか、この本を読むまで今現在のことばかりを考えていた。春がくるとき、新しい学年、友達、新しい何かにわくわくしたり、不安がったり、自分のことばかり。でも私たちは生きているか

らこそ色々なことが起こる。その色々なことは、良いことばかりではない。大変なこともたくさんある。それを乗りこえなくてはならない。四季が必ず巡り春が来るから、私は桜がきれいに咲くまで、長い冬をじっとこらえて乗りこえる。『また次の春へ』は、大切な人を亡くし、残された人々のことを伝え、私にこれからどんな春につなげていけば良いのかを心から考えるきっかけをくれた。そして、一日一日を大切に生きよう、知らない誰かのために動ける自分でいよう、と思わせてくれた。今年は祖父の七回忌にあたる。十二月はこれまでの十二月とまた違った気持ちで迎えることができるだろう。

『火垂るの墓』を読んで

弘前大学教育学部附属中学校　三浦夏帆

戦争は魂すら不幸にする。死んでなおも後悔と無念の思いのみを残し、魂は救済されない。ならば、戦争とは何なのか。私たちの命は、蛍のようにはかないものなのに、どうして人間同士の殺し合いで命を無駄にしてしまうのか。どうすれば、人類は戦争から卒業できるのか。私の戦争に対する疑問は無限に存在した。そんな私の心を動かしたのがこの本だった。表紙には、一人の少女が立っていた。この少女が「戦争」の本当の意味をさがす物語だと思い、この本を手に取った。

登場人物の清太は、何度自問しても答えを見つけることができないのだ。節子を死なせたのは、自分の弱さなのか、戦争なのか、心の中に潜む悪なのか……。尊敬する海軍軍人である父が命を懸けた戦争。その父と母を殺した戦争。そして節子の命までも奪った戦争。戦争をただ絶対悪だと、全責任を押し付けられぬジレンマ。だから、後悔と悔しさ、無念さと共に、彼の魂は、何度も何度も繰り返し辛い世界へと戻ってしまう。戦争が無くなった今でも、彼らの魂は今も問い続けている。いや、我々に問いかけているのではないか。「未来という無限の可能性を若者達から奪うもの、それは戦争か。戦争を起こした人なのか。争い傷つける心をもった私たち自身なのか。」と。

私は、戦争というと、人間同士の殺し合いで、多くの命を奪い、人類が滅亡していく、とても恐しいものだと認識して生きてきた。あの時代を生き抜くのに、人々は自分のことだけで精一杯だから、他人のことをとても考えてあげられなくなるのだ。それは人のせいではなく、戦争そのものが皆の心を意地悪にする。戦争さえなければ、皆心優しい人間なのに。

それに、よく考えてみると、西宮の小母さんが、清太を叱るのも当たり前のことではないだろうか。小母さんが口に出す言葉は一見して残酷だが、もっともなことを話している。世話になっているのに、二人は「ありがとう」も言わずにいた。しかし、働いてあげるどころか、感謝の気持ちさえも伝えずに、ただ家にこもっていた。二人は母を無くしかわい

そうだが、他人の気持ちをもっと考えるべきだと感じた。世界は一人で住んでいるのではなく、人々はお互いに助け合い、支えあって生きていくからこそ、この世を生き抜くことができるのだ。あの時、小母さんが口にした一つ一つの言葉が、私の心に突き刺さっていった。

本から読み取れる、清太の心情は、意地悪な小母さんを責める気持ちに悩み後悔しているのではないかと感じる。この問いは、

「なぜ、節子は死ななければいけなかったのか?」という、解けない問いかけを繰り返しているのではないかと感じた。

この問いは、

「なぜ戦争では納得のできない死が次々と生まれてしまうのか。私たちはどこで間違えたのか。」と、私たちに向けられた永遠の問いかけのように思えた。清太は尊敬する父の威厳ある姿を思い出していた。その戦争は、家族の命を奪い、人々の心から良心を奪った。戦争を恨みたい。しかし、戦争で散った人々の意を無下にすることはできない。このジレンマを残された者たちは抱えていくことになるのだ。

この本を読んで私は、戦争という極限状態の中で、火垂るの墓に出てくる登場人物たちは、心の余裕をもつことができなかったことに心の奥底が響いた。戦争と戦う苦しさが身に染みて感じられた。この本は、兄妹が戦争中にでもたくましく生きる話を物語っているだけではなく、戦争の苦しさや、その時代に生きる人々の気持ちを深く描いているのではないかと感じた。現在、私たちが生きる世界において戦争を無くすことは不可能なのか。それを考えることが我々人類にとって大切なのではないだろうか。そんな今だからこそ、私たちは、火垂るの墓の時代に生きて死んでいった人々に想いをよせ、今やるべきことは一体何なのか考えていくべきだと強く感じた。

『一〇五度』を読んで

弘前大学教育学部附属中学校　川村勇太

何て後味の悪い終わり方なんだ。せっかくチェアコンペで審査員特別賞をとったのに、まだ認めないのか、この頑固な父親は。ぼくが今まで好んで読んできた小説は、主人公が努力の末、成功や勝利を収めるものが多かった。しかし、この本を読み終えた後、腹立たしさが残った。なぜ、この父親は、我が子の夢を応援しないのか。なぜ、この父親は、我が子の人生を決めつけ指図するのか。反発心を抱きながら、もう一度初めからページをめくってみた。

主人公の大木戸真は、椅子のデザイナーを目指す中学三年生の男の子だ。転校した先で梨々と出会い、共にチェアコンペに挑戦する中で、自分が本当に進むべき道について考えていく。真の家族は五人家族である。元イス職人の祖父、病弱な弟、真のやりたいことを少しは応援してくれる母親、そして、父親である。

ぼくは、真がうらやましい。はっきりした夢があるからだ。そして、その夢に向かって一途になることができるからだ。ぼくには、まだはっきりした夢がない。以前はあった。水泳の指導者になりたいと思っていた時期があった。ぼくたち選手の泳ぎ方の課題を見つけ、的確に分かるまで教えてくださるコーチに憧れの念を抱いたからだ。しかし、今はちがう。「なりたい」から「なる」に変えることができないまま、今は、将来の夢がない。だから、真がうらやましい。それなのに、真の父親は、息子が望まないのにエリート高校を受験することを望んでいる。息子の夢を否定する。自分の望む「まともな路線」を選ばせたがる。

「まともな路線」。安定した仕事について安定した給料をもらって安定した生活を送る。現実的で堅実だ。少なくとも、将来の夢が決まっていない今のぼくだったら、選んでもおかしくはない。もし、この先、「まともではない路線」と「まともな路線」を天びんにかけることになっても、「まともな路線」を選ばないとは言い切れない。

でも、真はちがう。ただ、ひたすらに自分の夢に向かって、

努力しているのだ。親心が分からないのではない。でも、真の父親は何かがちがう。病弱な弟の分まで真に期待をし、期待通りにできないとひどく怒ったり叩いたり、もっと努力しろ、根性がないとののしる。真は、イスのプロジェクトを進めながらも、勉強も手を抜かない。それなのに、なぜ怒られなければいけないのか。

真の父親は一つの障害物なのだろう。陸上の障害走で例えるならば、夢がゴール、そして、父は真にとって最初のハードルだ。それを乗りこえなければ、ゴールどころか次の一歩も踏み出すことができない。今、真は最初のハードルを越そうとしているところなのだ。このハードルを越せたとしても、次のハードルはもっと高いかもしれない、それも、すぐにやってくるかもしれない。ハードルが全部でいくつあるかも分からない。そうなったときに、ひたすらゴールを目指していく原動力になるものは何だろうか。それは、夢に対する思いの強さだろう。思いが強ければ強いほどハードルを乗りこえるためのスピードも速くなるし、高く跳ぶことができるのだと思う。ぼくが今打ちこんでいる部活の水泳だって同じだ。一つの大会に向けて目標タイムを設定し、日々練習している。タイムをクリアしたいと思う気持ちが原動力となり、日々の苦しい練習も乗りこえられる。逆に、こんな練習いやだと弱音を吐きそうになることもたくさんある。何でこんなに泳がなければならないのだと、急にいやになることもある。障害は自分の心の中から生まれることもあるのだ。

ぼくはこの本を読んで、どんな障害があっても乗りこえようと思えるぐらい、やりたいことやなりたいものを見つけたいと思った。

そして、いつかやりたいことやなりたいものが見つかった時は、「やりたい・なりたい」で終わるのではなく、「やる・なる」に変えて、それらに向かって努力していきたい。途中に立ちはだかる障害は多いと思うが、くじけずそして諦めずに自分が本当に進みたい道を見つけ出して、進んでいきたい。

読んだ直後の後味の悪さはなくなった。今は、いつか自分のはっきりした夢が見つかるのが楽しみだ。

「まずは、今日の練習を精一杯頑張ることから始めよう。」

『代筆屋』を読んで

弘前大学教育学部附属中学校　北山　沢

ぼくは、あまり感情を表に出す方ではない。テニスの試合でスマッシュが決まっても小さくガッツポーズ。決して大声で叫ばない。思うようにショットが打てなくていらいらしても、それを表情に出さない。かっこわるいと思ってしまう。周りの様子を見ながら、自分の感情をおさえてしまうことが多い。これは性格だからどうしようもないが、誰に対しても積極的に話しかけ関わっていける友達を見ると、考えてしまう。学校でも、先生から、もっと自分から発表したり、仲間以外とも話をしていこうと言われたりするが、かなり難しい問題だ。そんな簡単に、自分の気持ちを表に出すことはできないからだ。

だからこそ、口ではなかなか言えない気持ちや、何度も何度も伝えたい気持ちを残す時、相手に手紙を送ると、ぼくはずっと思ってきた。実際今まで手紙を書くといえば、家族への感謝やお祝いの時、そして、転校した友達への手紙だけだった。相手に伝えたい思いがあふれだしそうな時、自分の思いを自分の言葉で書くことで、相手の心に思いが届くと考えていた。

しかし、今回の手紙は「代筆」。つまり、自分で書くわけではない。ぼくなら、代筆を頼むことは絶対にしない。自分の気持ちを第三者に話すこと自体、はずかしくて考えられないからだ。だから「代筆」という言葉に否定的な思いをもち、この本を読むことにした。

代筆を依頼した人たちの年齢、性別、理由はさまざまだった。代筆を頼んだことで、気持ちが前向きになり、また人生を歩き出すきっかけとなる話が多かった。一つ一つの話を読みながら、興味をもつことはできたが、どうしても代筆への否定的な気持ちが消えなかった。

ただ一つだけ共感できたのが、『雪のかまくら』という話だ。入院している祖母は、ずっと孫に会いたいと思っていた。しかし、その孫はすでに亡くなっていた。祖母を思い、祖母を元気づけたいと、孫の代わりに手紙を書くというお話だ

った。この話だけは、代筆を依頼したのが本人ではなく、祖母のことを心配した息子夫婦だったのも、印象的だった。代筆した孫からの手紙を読んだ祖母は、元気を取り戻していく。孫にいつか会えるという希望が生きる希望となっていたからだ。命は誰でも一つ。そのたった一つの命を長引かせるために、祖母の家族も、代筆を続ける筆者も、必死だった。この話の「代筆」は、祖母にも家族にも、希望と幸せを与えるうそだったと思う。

そして、何よりもぼくが好きだったのは、祖母が残した孫への最後の手紙から見えてくる場面だ。そこには、亡くなったはずの孫との再会や喜びが書かれていた。彼が本当に会いに来てくれたのか。それとも、祖母の夢なのか。それは分からない。でも、ぼくは、孫が大好きな祖母に会いに来てくれたと信じたい。代筆での祖母との手紙のやりとりをずっと天国から見ていて、最後の最後、祖母に会いに来てくれたんだと思っている。

今ぼくには、「代筆」を否定する気持ちはない。「代筆」を通して幸せを共感できたからだ。しかし、いざ代筆を頼もうとは思わない。やっぱり自分で考え、自分の言葉で相手に伝えたい。あまり進んで気持ちを表に出さないぼくだからこそ、手紙で、または口で、はっきりと相手に気持ちを伝える人でありたいと思う。そして、手紙や口で伝えた時の相手の表情を想像しながら、どう伝えたらいいかを考える時間も楽しみたいと思う。

中学校二年の部　佳作

『名人伝』を読んで考えたこと

弘前市立新和中学校　髙橋香圭

対象作品／中島敦著『名人伝』筑摩書房

才能とは、どのようにして生まれるものなのでしょうか。『名人伝』を読んで私は才能と努力の違いについて考えることができました。

『名人伝』は天下第一の弓の名人を志す紀昌が師匠の元で厳しい修業を重ね、ようやく名人という称号を手にしたものの強くなりすぎたための疎外感、通り過ぎていく日常、紀昌

が最終的に描いた「弓を射る」とはどんなことなのかを考えるお話です。私はこの話を読んで、一度決めたことを貫き通す紀昌は、すごいと思いました。名人になるまで修業を続け、何年もの間諦めない姿は、とても出来ることではないので、紀昌は、ねばり強く、不屈の魂を持っている努力家だと私は考えました。

「至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなし」という言葉は、私が一番印象に残っている言葉です。この意味は「射るという行為を追求していくと射る行為を越える段階に達する。言葉を追求すると言葉を越える段階に達し、弓を極めれば弓を射ないという段階に達する。」です。この言葉から、紀昌は、たくさん努力を重ねてきたからこそ言えたことだと思いました。

私は、一つのことに一筋で取り組むことができず、肝じんな所で失敗をしてしまうと、心が折れて諦めてしまいます。でも、紀昌の懸命に努力をする姿を読み心を打たれました。私は一つのことに集中する時、どうしてもあきてしまう癖があるので、紀昌のように一つのことに集中して打ち込めるようになりたいと、心から思いました。

人は元々自分がそなえた才能をそれとは気付きません。その人にとってはあたり前のことだからです。例えるとすれば、鳥が空を飛べることを人々はうらやましいと思っているけれど鳥はそれを才能だと思いません。このように、人は自分にある才能をあたり前だと思いこみ、他人から見るとその人は才能があるように見えます。それは、紀昌も同じです。紀昌は、自分にとってあたり前のように、一つのことに対して熱を注いで努力を怠りませんでした。私の目からすると、十分すごいことで、うらやましいです。紀昌は努力する才能があると思いました。

私は、『名人伝』を読んで、考えたことが一つあります。それは、人は誰しも才能を持っている、ということです。人には必ず一つは才能があると私は思います。人は人生で必ず妬み嫉みを経験します。人は自分にないものを他人に見つけると、嫉妬を生みます。でも人と人を比べることで、それぞれの才能を見つけることもできます。才能は、無意識のうちに動作や口に出ていることがあります。才能とは、人によってたくさんあります。明るく笑わせられること、人の良い所をみつけられること、人に優しくできることなど、私たちにとってあたり前のことも才能です。私の才能とは何か……。じっくりと探していこうと思います。

対象作品／梨木香歩著『西の魔女が死んだ』新潮社

自分に必要な力

弘前市立第一中学校　三浦可帆

私は『西の魔女が死んだ』という本を読んだ。この本を選んだ理由は、去年この本の著者である梨木香歩さんの『裏庭』という作品を読み、集中して読めたため、他の作品も読んでみたいと思ったからだ。

主人公は「まい」という中学生だ。クラスの中で「敵」に決められ、学校に行くのが嫌になってしまい、ひと月あまりを「西の魔女」ことおばあちゃんの家で過ごす。そこで「魔女修行」が始まり、様々なことを学んでいくという物語だ。

この話の中で印象に残っているおばあちゃんの言葉が二つある。

一つ目は、「魔女になるためにも、いちばん大切なのは、意示の力。自分で決める力。自分で決めたことをやり遂げる力です。」という言葉だ。なぜなら、意示の力は、魔女だけでなく、普通の人間にも生きていくために必要な力だと思ったからだ。私はいつも人の指示を待ってしまい、自分で決めて行動することが全くできない。そのため、この言葉を目にした時、これはどこでも同じく、大切なことなのだと思った。魔女修行を始めた時に、おばあちゃんはまず基礎トレーニングとして「精神を鍛える」ことをあげた。そしてこの言葉を発して、「そんな簡単なことっていいますけれど、そういう簡単なことが、まいにとってはいちばん難しいことではないかしら」と言った。私も簡単だと思うことほど難しいと思う。自分で決めることは難しく、迷うことがたくさんあるが、その分責任をもってやり遂げることができるようになると考えた。部活や学校生活で少しずつ簡単なことからでも自分で決めて、集中して取り組めるようになりたい。そして、無駄な時間を減らして自分がやりたいことをより多くできる生活をしたい。

二つ目は、「死ぬ、ということはずっと身体に縛られていた魂が、身体から離れて自由になることだと、おばあちゃんは思っています。きっとどんなにか楽になれてうれしいんじゃないかしら」という言葉だ。理由は、死ぬということを暗

くとらえず、楽になれると考えているのがすごいと思ったからだ。まいは父親に、人は死んだらどうなるのかと聞いたことがあったが、あまり良い答えをもらえず、おばあちゃんにも同じことを聞いた。そのときにまいをなぐさめながらおばあちゃんが自分の考えを話した。最近、戦争に関する番組や歴史人物の本を読んで、「死ぬとどうなってしまうのだろう、怖いな」と考えることがよくある。魂が身体から離れるという考えは自分にもあったが、生きていた頃の自分の意識は残っているのか、魂はどこにいくのか、ということを考えると不安になる。「死ぬ」ということは暗いイメージが多いが、長い間頑張った魂が休けいするために、人間には死があるのかなと思った。そして、また新しい身体に魂が入り、生まれ変わった時に前世の生活、自分の力が役に立てば良いなと思う。

「死」に関することだけでなく、何に対しても良いイメージを作ることはとても大切なことだと思う。私には苦手なことがあるとマイナスなことばかり考えてしまうという短所がある。まいのおばあちゃんは、まいにとって悪い印象の人がいてもその人の長所を知っていると思う。そのように、まずはプラスになることを探して努力していけば、少しずつでも楽しくなることが増えると思う。そのため、楽しむためには文句ばかり言うのではなく、人の倍努力をして授業などの回数が増えるたびに、何か成長したことがあるということが必要だと思う。そしてその状態が続くことが最も良いことだと思う。おばあちゃんが教えてくれることは誰にとっても大切なことで、まいも物語が進むにつれてどんどん明るくなったと思う。まいは転校することになるが、私がまいに声をかけるとしたら、新しい学校では、まいが前からもっていた真っすぐ生きようとする強さを捨てずに楽しんで頑張ってねと伝えたい。

その後のまいの日常が書かれた『渡りの一日』に登場するショウコは、まいの強さを認めているからこそ仲良くできていると思う。ショウコの、自分と違う考え方をしている人でも最初から否定しないという考え方を見習って、様々な考え方を自分もできるようになりたいと思った。

この本を読んで、私は自分で考えて行動する力、物事に対して前向きな姿勢で取り組む力、自分にない考え方を知ろうとする力が今の自分に必要な力だと思った。これから、何事に対しても努力をして自分の力にできるものをつくっていきたい。そして大人になってふり返った時に、後悔することが少なく、楽しかったと思えることを増やしていきたい。

対象作品／辻村深月著『かがみの孤城』ポプラ社

誰かのために

弘前市立第二中学校　竹森菜奈

「かがみの孤城」。気になってページをめくっていた手が止まりました。それは、学校に行けなくなってという文を見たからです。私は学校が楽しいです。学校に行かないことなんか想像もできませんでした。

こころも初めは普通に学校へ通っていました。しかし、他人の恋愛に巻きこまれ、そこからクラス内での嫌がらせが始まりました。家に来られて、ドアをドン！ドン！ドン！とたたかれた時は、とても怖かったと思います。

ここまでのことではなくても、嫌がらせをしたり、人の悪口を言う人は、私の身の周りにもいます。人の事を言う他に話すことがないの？と聞きたくなります。

こころは、このせいで学校に行けなくなってしまいました。でも、ある日、部屋の鏡が光って、鏡の中に城が表れたのです。城には、こころと同じ、中学生くらいの子たちが、こころを入れて7人いました。驚いたこころ達の前にやってきたのは狼の面を被った少女でした。これから、こころ達はこの城で共に過ごしていきます。

私の身近な人も、ある事がきっかけで学校に来ることが出来なくなりました。とても明るくて、部活も一生懸命だったので、悲しかったです。直接その子が、悪口や嫌がらせをされた訳ではありませんが、友達がからかわれたり、悪口を言われているのを聞くのがつらくて、来られなくなってしまいました。

きっと多くの人は、自分がされている訳ではないのになぜ？と思うでしょう。

でも、私には分かります。私もそういうのを聞くと悲しい気持ちになるからです。

だから、この本を読んでいて、登場人物は私と同じ中学生、私の身の周りにも同じような事が起こっていることもあり、この本にはとても共感しました。そしてこの先、こころを始めとした主人公達はどうなるのだろうと心配しながら読みました。

ただ、この城には願いが一つだけ叶う鍵がありました。でも、誰かが願いを叶えてしまうと、その時点で城は閉じ、城での記憶もなくなってしまうことを狼少女に告げられました。私がこころの立場だったら鍵を見つけたとしても、隠しておくと思います。城で、せっかく仲良くなった友達との記憶がなくなるのは、やっぱりさみしい気がするからです。実際、こころ達も鍵を見つけた後、どうするか悩んでいました。そして、見つけたとしても、本当に最後城が閉じる時まで使わないと決めました。私も、こころ達の意見に賛成でした。

けれど、アキが城の閉まる五時を過ぎても帰らなかったせいで、連帯責任として狼に食べられるというペナルティーが課せられました。でも、その日城に来ていなかった人だけはペナルティーの対象外です。その日、こころだけは城に来ていませんでした。こころは皆を助けるため、アキのルール違反をなかったことにするため城へ行き、鍵を見つけることを決心しました。

荒れ果てて、暗くなった城へ足をふみ入れるのは、とても不安だったはずです。こころの勇気には感動しました。

こころが鍵を探している間、皆のたくさんの記憶に触れました。親などからのプレッシャー、嘘をついてしまう自分、お姉ちゃんの死。悲しい、つらい記憶もたくさんありました。私も読んでいて、心がしめつけられるようでした。

やがて、こころは自分を含めた7人が、それぞれ違う年代での雪科第五中学校の生徒であることに気づきました。そして、鍵を見つけたこころは、「アキのルール違反をなかったことにしてください」と願いを口にしました。

願いが叶ったら記憶はなくなってしまうし、皆もそのことを望んでいなかったと思います。もちろんこころも。でも、アキや皆を助けたいというこころの、仲間を大切に思う気持ちがとても伝わってきました。

この本を読んで、一番心に残った言葉は、最後にこころがアキへ向けて言った「未来で待ってるから」「2006年。アキの十四年後の未来で私は待ってる。会いに来てね」です。時代は違っても、未来で会える。助け合える。だから、生きていてね。という、こころの気持ちが伝わってきました。こころ達はこういうふうにつながっていくのだと思います。私は、こころ達は必ず未来で会えると信じています。

私の世界では、「かがみの孤城」は存在しません。けれど私が、私の大切な友達にとっての「かがみの孤城」に少しでもなってあげられたら良いなと思います。

対象作品／中島敦著『山月記（李陵・山月記・弟子・名人伝）』ＫＡＤＯＫＡＷＡ

いつだって〝人間〟であるために

弘前大学教育学部附属中学校　小島にこ

最後、その虎が白い月へ吠えたとき、私の目からは涙が出てきた。なぜ涙があふれたかはわからなかったが、この話が、私に大きな事を訴えかけているのを感じた。

一つ、この話の中で、私の胸に爪跡を残した言葉がある。

「臆病な自尊心」というものだ。

「もちろん、かつて郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。」李徴はそう語っている。臆病、という弱さから、自尊、という強さが生まれるのだろうか。初めはわからなかった。しかし、二度目に読むうちにやっとわかってきた。昔から才能があるともてはやされていた李徴は、詩で名を為そうとした。しかし、師についたり、いわゆるライバルと切磋琢磨しあったりなど、自分を高めるような行動には出なかった。恥ずかしいからだ。自分を高めるには、自分の短所を直さなければいけない。つまり、自分の非をさらけ出し、認めなければいけないのだ。若くから俊才といわれてきた李徴にとって、それは何よりの屈辱であっただろう。李徴は、その「尊大な羞恥心」で、自分を高める道を閉ざした。

羞恥心が侵食した、穴ぼこだらけの実力。この穴を埋めたのが、「臆病な自尊心」だ。自分の才能の底なんて見たくない。底なんてない。そんな臆病な気持ちから肥大した空虚な才能は、本当に持っていたものさえも潰していっただろう。

「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」。この二つの感情、この二つの猛獣に、李徴は飲みこまれてしまった。虎は、その模様が文字の羅列に見えることから、「文字の獣」といわれているそうだ。言葉や文字を操る詩人を目指した彼は、逆に文字に纏われた獣になっていってしまった。彼の文字への執着が転じた結果、文字に捕らえられてしまったのだ。部分的に李徴の夢が叶ってしまっているのが恐ろしいところだ。

素直に努力をすればよかったのだ。穴のない才能を、生まれながらに、努力もなしに持っている人なんていないのに、

と私は思った。しかし、妙に背筋が伸びるような感覚がした。私だってそうなのだ。

勉強や美術部での活動。数字や言葉の評価ではっきり優劣をつけられてしまうのが、私には痛くて仕方がない。もちろん、特別悪くないのだってわかっている。下には下がいる。それでも、同じように上には上がいる。自分の足りない部分が見えてしまう。私だって、もうちょっと勉強していれば、練習していれば、追いつけたんだもの。そんな風に逃げてしまうことが、少なからずある。それでは駄目なのだ。そこから言い訳して目を逸らしてしまえば、私は虎になってしまう。その劣等の穴ぼこに落ちてしまわないよう、埋めていかなければいけない。そして、その穴を埋めるのは、いつだって努力でなければいけないのだ。

獣は、自分の感情一つで動いてしまう。その感情、つまり猛獣の心を、おさえられるのは人間だけだ。感情を噛みくだいて、次に目を向けられるのは人間の証。そして、辛い胸の内を言葉にして打ち明けられる、「友」という存在を持つのも人間だけだ。李徴が袁傪と出会って人間を取り戻したのはきっとそういうことなのだろう。

そのメッセージが、私の心に伝わってきた。

題名を聞いたことがあるし、面白いらしい。そんな軽い気持ちでこの作品を選んだが、これからの私に、とても大切なことを教えてくれた。

中学三年生。進路について本格的に考えだした今、そのもっと先を見すえながら目の前のことをこなさなければいけない。すると、今の自分と夢や理想との差を突きつけられることもあるし、きっとこれからもそのようなことがずっと続いていくのだろう。正直わたしは今、周りの人たちや理想との差に慌(あわ)てて戸惑ってる最中だ。それでも、自分の非を受け止め、噛みくだいて、前を向いて、逃げずに進んでいくべきなのだ。認めたくない、見たくない、進みたくない、頑張れない。そんな心の猛獣たちをつなぎとめるものを、いつでも持っていようと思った。それが私が、人間でいる意味だ。

彼に手紙を書けるなら

弘前大学教育学部附属中学校　西田その

「だが声がでない。
どうしてもでない――。」

書店で何気なくページをめくっているとき、最後のページのこの文章に目が止まった。喜びや嬉しさのあまり、感極まって思うように声がでなくなることはあるだろう。しかし、この文からは、思いが込み上げすぎて気持ちを言葉にできない「苦しさ」が伝わってきてとてもひかれた。物語の内容を全くわからなくても、なにか、人間の感情のもどかしさを強く訴えかけるものを感じたのだ。それがどうしても気になり、私はこの本を手に取った。

この物語は、主人公「直貴」と、彼の兄であり強盗殺人の罪で服役中の「剛士」の手紙を通しての関わりを描いたものである。剛士以外に身内のない直貴は、兄の犯した罪によって音楽、夢、恋愛のすべてがうまくいかず、社会で孤立したと感じてしまう。

「結局こうなるのだ――。」

日々疎外感を噛み締める直貴は、自分の人生に対して自暴自棄になってしまう。すべてをあきらめなければならず、世間の目を気にして生きていく人生は、私には想像できない。兄の存在を隠して生きていこうとするたびに、彼の人生への期待が絶望に変わっていく様は読んでいてとても辛かった。そして、直貴はいつのまにか、兄からの手紙を受け取るのを苦痛に感じて返事も出さなくなってしまう。それはおそらく、送られてくる手紙が直貴にとって、獄中の兄の存在を示すただ一つのものだったからだろう。「俺は悪くないのに」と、心の中で燻っていたやり場のない怒りを兄にぶつけ、手紙を読むたびに自分の人生や兄を憎むようになったのだ。「自分の人生をめちゃくちゃにしたのは兄貴だ」と。

直貴は兄のせいで不幸な人生を歩んできたのかもしれない。直貴は可哀想な人でもあるのかもしれない。しかし、私は直貴に、

「本当にあなたはそうだった？」

と聞きたい。何故、兄は罪を犯したか。それは、貧しいけれども就職しながら大学へ行こうとする直貴の学費を手に入れるためだ。金銭的な問題で大学に行くことは難しく、仕事のしすぎで兄の体はぼろぼろだった。そんな状態で、大学も就職も諦められない直貴は、少し中途半端なのではないか。自分の夢をあきらめるのはとても苦しい。また、「大学を諦めるのは兄貴が反対する。」と直貴は思うはずだ。けれども、幼い頃から二人三脚で歩いてきた兄を思うのならば、たとえ反対されようとも「就職するんだ」と決断し伝えるべきだった。なぜなら、兄は直貴が大学へ行くことも望んでいたが、本当に望んでいたのは直貴が幸せに生きることだったから。私にはそう思える。直貴にとって、兄はこの世でたった一人しかいない大切な存在で、兄にとってもそうだ。無理をしながら働き、強盗を行って弟を幸せにしようとした兄の決断は間違っていた。しかし、自分と兄のどちらの思いも汲もうとするあまり決断できなかった直貴は可哀想といえるのだろうか。どちらが悪いとは、簡単には言い切れない。

私には弟が一人いる。喧嘩することもあれば、弟が何をしたいのか理解できないときもある。けれど、もしこの二人のような状況になったなら、強盗殺人は絶対にしないが、私も兄のように自分よりも弟に幸せになって欲しいと思うだろう。しかし、弟に私が身を粉にしてまで働くことを望まない気持ちがあるならば、私と弟はどちらも幸せにはなれないと思った。おそらく、直貴にも同じ気持ちはあったはずだ。しかし、その気持ちがありながらも、彼は兄の「幸せになって欲しい」という本当の思いに気付けなかった。いや、気付いたつもりでいたのだと私は感じた。

私は、人は誰かを思い、思い合って生きようとするのだと思う。しかし、互いの思いが噛み合わなかったり、本当の思いに気付けないときもある。人間の感情は複雑で厄介だ。でもだからこそ、互いの気持ちを伝え合い、共有していくことが大切なのだ。兄はそう思ったからこそ、弟に手紙を書き続けたのではないのだろうか。

直貴が自分の人生に対して絶望しているのは、彼自身に決断力がないからだと私は思う。彼が幸せになることができないのは、どこかで幸せをあきらめているからだ。それならば私は、直貴に手紙をきちんと読んでほしい。兄が自分の幸せを切に願っていることに気付き、自分を思ってくれている兄の愛を忘れないで欲しい。そうすれば、直貴はたとえ兄を恨む気持ちがあっても彼を受け入れられ、自分の幸せへの道をしっかりと決められると強く思う。

もし、直貴に手紙を書けるのなら、私はこれらの思いを兄の手紙に添えて、彼に届けたい。

『にじいろガーデン』

弘前市立第二中学校　佐藤和奏

対象作品／小川糸著『にじいろガーデン』集英社

『にじいろガーデン』。私はこの題を見たときににじいろガーデンとはどんなものだろうと思った。読み終えると、私の心は温かい気持ちでいっぱいになった。

夫との関係に悩む泉は、ある日女子高生の飛び込み自殺を止める。事情を聞いてるうちに彼女がレズビアンであることを知る。やがて二人は魅かれ合い、お互いかけがえのない存在となっていく。家族として共に歩むことを決意し、理想の地を求めて山里へ移り住んだタカシマ家は、泉、千代子二人の母と、草介、宝二人の子供の四人で生活し始める。

私はまずレズビアンに衝撃を受けた。レズビアンが同性愛者だということは知っていたけれど、私は十四年生きてきてまだ出会ったことはなかった。実際に交流があったとしたら私は偏見の目で見たり差別をしてしまっていたと思う。

先日、新聞を見るとある議員が「同性愛は趣味みたいなもの」、「生産性がない」などと発言したと書かれてあった。この本の中でも「女同士で手をつないで歩くわたしたちは、ここにいるのに黙殺され、いないことにされてしまう」という文章があった。やはり、社会では理解が薄いというのが現実なのだと思う。けれど、私はこの本を読んで考え方が変わった。

泉と千代子が移り住んだ山里にも、「オナベ」と書かれた鍋など用無しになった鍋を家の前に置かれるという嫌がらせがあった。けれど二人は鍋をお鍋の歌を口ずさみながらきれいに磨いていく。そしてこの鍋たちは、二人が始めた「ゲストハウス虹」で鍋料理をふるまったり、穴のあいたものは植木鉢として再利用された。二人がふるまった鍋料理はたくさんの人を元気づけたり、救ったりした。植木鉢はたくさんの花を散らかせる場所となった。私は人も同じだと思った。外見や相手のことを知らないくせにその人のイメージを決めつけるのは違うと思った。私は二人が一生懸命鍋を磨き、鍋を再利用させた姿に一人一人にその人にしかない良いところがあるのだと思った。そして、二人が一生懸命鍋を磨いていた

ように、人と関わり、人の良いところを見つけるためには一生懸命にならなければいけないと思った。時には、なかなかおちない鍋の焦げのようにこの人には良いところなんてあるだろうかと思い悲しくてつらい思いをするかもしれない。けれど、そんな時はこの本の二人を思い出そうと思う。悔しくて悲しい思いがいっぱいでも明るく前を向いて鍋を磨いていた二人の姿を。

カカみたいに、強い人になる。ママみたいに明るい人になってみせる。ニーニーみたいに、優しい人にもなりたい。でも、私は私だけの色の花を咲かせる。そして、素敵なオハナ畑を作るんだ。それがきっと私の使命だと思うから。

このシーンは二人の子供、宝の章にある。千代子がガンで亡くなり、草介は植物状態となってしまった。私はタカシマ家はばらばらになってしまったと思い悲しかった。けれど、家族というのは死んでも、意思疎通ができなくなったとしてもその人が伝えたことがつながっていき、家族の中でその人は生き続けるのだと思った。千代子の家族に対する思い、草介の野球に対する思いなどは宝につながっていた。

オハナ、ハワイでは家族という意味の言葉が出てくる。お花が色鮮やかなようにそれぞれの家族に色がある。お花畑に陽が当たったり、雨が降る日があるように、家族にも笑ったり、怒ったり、泣いたりする日がある。お花畑に手入れをしたり、耕したりしなければならないように努力も必要だ。家族には年齢、性別は関係ない。私はこの本を読んで強く思った。家族とはと聞かれて以前ならなんとなく大切な存在と答えていたと思う。今でも同じように答えると思う。けれど、私は家族とは大切な人とつくりあげていくものだとこの本を通して知ることができた。私も自分だけの色の花を咲かせられるように今を精一杯生きたいと思う。そしていつか、父と母のようなオハナ畑を作れたらいいなと思う。

中学校三年の部　佳作

対象作品／瀬尾まいこ著『あと少し、もう少し』新潮社

本当の自分を

弘前市立第一中学校　鎌田笑歌

孤独とは何か―。独りぼっちでいることだけが孤独だとは私は思いません。それはたとえ仲の良い友達や信頼できる部活の仲間に囲まれていても、時々孤独を感じてしまうことがあるからです。孤独は寂しくて辛いもの。それが私を苦しめます。しかしこの本に出会って、孤独を抱えているのは自分だけではないと気付きました。本を読み進めていく内にもやもやとした心が少しずつ晴れていくような気がしました。

中学最後の駅伝大会に向けてメンバーを募る陸上部部長の桝井。メンバーを集めるだけでも困難なことでしたが、駅伝にかける彼の熱い思いが実を結び、ついに市野中学校は駅伝チームを結成することができました。

設楽、大田、ジロー、渡部、俊介、そして桝井。六人のメンバーはとても個性的で、その誰もが魅力のあるキャラクターです。そんな彼らの良いところは、お互いの長所を素直に認め合っているところだと思います。支え合い励まし合いながらひたむきに走り続ける彼らの姿は、とてもまぶしく輝いていました。

この物語の中で特に印象に残ったのは、俊介が渡部に言った言葉です。

「どういうのが親友かって難しいけど、自分の中を見せてもいいと思える相手は親友って呼んでもいい気がするんです。」

私はこの言葉に心を揺さぶられました。私には仲の良い友達がいます。でも、自分の中を見せるとなると少し抵抗があります。それは「理解されないかもしれない」、「嫌われるかも知れない」という考えがあるからです。それは俊介も同じでした。俊介は悩みを抱えていて、それを友達に打ち明けようか迷いましたが、結局打ち明けることができませんでした。友を失うのは彼にとってとても辛いことだったのです。

渡部はそんな俊介に自分の悩みを打ち明けました。今まで誰にも心を開かなかった渡部が悩みを打ち明けたことに対して初めはとても驚きましたが、彼の行動は俊介に心を開く勇気を与えたのだと思いました。

駅伝を通して、六人は変わったと思います。彼らは一人一人孤独な思いを抱えていましたが、それはみんなが「自分をつくろっている」からでした。本当の自分を出せずに、みんなが苦しんでいました。私が孤独を感じるのも本当の自分を出せていないからだと思いました。自分の意見をなかなか口に出せない私は、他の人の意見にただただ賛成しているだけで、自分の意見を言うことがあまりできていません。それに対して駅伝を通して成長した彼らは、徐々に自分の思いをそれぞれが伝えるようになりました。それこそが彼らの仲を深めるきっかけとなり、チームとして大きな成長を遂げることにつながったのだと思います。私もそんな彼らのように「自分の思い」を伝えられる人になりたい、なろうと決心しました。

この本から学んだことはたくさんあります。その中でもこれからの自分に必要だと感じたのは、「本当の自分を出す」ということです。自分の思いを伝える努力をし続けることで、いつか本当に自分を出せるのではないかと思いました。自分らしく生きていきたいです。

中学校三年の部　佳作

『永遠の0』を読んで学んだこと

弘前大学教育学部附属中学校　三上萌衣

対象作品／百田尚樹著『永遠の0』講談社

戦争の時代を生きていない私達にとって、戦争とは未知の世界です。戦って死んでいった軍人の苦しみも、家族の帰りを待った女性達の悲しみも、飢えを我慢しながら懸命に生きた子供達の気持ちも、平和な時代を生きている私達には想像しにくい出来事ですが、『永遠の0』を読んだら、今までの考えがガラリと変わりました。私は戦争の時代を想像できなかったのではなく、しようとしていなかったのです。この本が、このような大切なことを教えてくれました。

『永遠の0』は、家族と生きる為に戦争の中を懸命に生きようとした、宮部久蔵というパイロットの物語です。

戦争中、「生きて帰りたい」、「死にたくない」などの言葉を話すことはいけないことだったそうです。今の時代、それ

らは当たり前の感情でしょう。しかし、宮部が口にすると、周りの人達は宮部のことを「臆病者」と呼び、からかっていました。なぜなら、宮部は志願兵だったからです。志願兵とは、自ら志願して軍隊に入った人です。つまり、戦争で死ぬ覚悟があるということです。それなのに死ぬのが怖いというのは、おかしい話です。ではなぜ、志願したのでしょうか。なぜなら宮部は両親を亡くし、遺産もなく、食べていくためだったそうです。つまり、軍人になりたくて志願したわけではないということです。それに、宮部には妻と子供もいました。きっと、家族に会いたかったことでしょう。国に貢献しようとがんばっている周りの人が宮部を嫌に思うのはわかりますが、宮部の考えも尊重すべきだったと思います。しかし、周りの人の考えを植えつけたのは日本という国です。戦争で死ぬという恐怖をなくすために行ったのでしょう。このころの日本は人の命を軽視し、まるで消耗品のように使っていました。ですが、そんな考えが広まっている中で、まわりに流されず、自分の考えを貫く宮部は、本当に家族思いで、素晴らしい男性だと思います。現代の日本人は、周りに合わせて自分の考えを隠す人が多いです。宮部のように自分の考えをはっきり言える人は何人いるでしょうか。私は宮部こそが現代社会に必要な人材だと思います。そして、見習うべきなのです。私も宮部のように人に流されず、自分の考えをしっかり持てる人になりたいと思いました。

しかし、こんなに生きたいと願っていた宮部は、最終的に特攻に参加して死んでしまいます。特攻とは戦闘員が爆薬を持ち、敵軍に突入する戦術です。要するに自爆です。これこそが、日本が人の命を軽視しているとわかる最大の理由だと思います。初めて知ったとき、本当に信じられませんでした。死ぬことが確定した作戦なんて行ってよいのかと。しかし、宮部は最後の生きられるチャンスがありました。宮部の乗る飛行機の発動機と呼ばれるエンジンが故障していたのです。特攻中に飛行機が故障して特攻できなくなったら、近くの島に不時着するのです。だからその日は命が助かります。しかし、宮部はその飛行機を理由も言わず他の男に譲ってしまったのです。その男は前に宮部が敵軍に狙われ、ピンチの時に命を懸けて助けた男でした。自分が助かるチャンスなのに、恩返しするためにそのチャンスを捨てるなど、私にはできません。しかし、残された家族はどうなるのでしょうか。私はやはり、飛行機は譲らない方がよかったと思います。家族の為にここまで生きてきたんだから、最後まで生き残ってくれと、涙で本を濡らしながらずっと思っていました。宮部の選択は、正しいとも正しくないとも言えません。ですが宮部の生き方は、損してばかりでした。周りに嫌われながらも自分の考えを貫いたり、大切な家族がいるのに自分の命を他人の為に使ってしまうなど、得をしたことなど一度もありませんでした。もう少し欲張ってもよかったと思います。きっ

と、宮部の芯の強さと人一倍大きい宮部の思いやりが、こんな損な生き方をさせるのでしょう。

宮部は周りの人達が死ぬのは当たり前、死にたくないなんて恥ずかしいことだと思っていても、周りの人に死ぬなと言い続けました。おそらく、自らが背負っている家族をもっと大切にしろという意味が隠されているのでしょう。私は物語の人物とはいえ、これほど命と家族を大切にした人を見たことがありません。結婚して家族ができたら宮部のように、命を懸けて大切にしたいです。そのために、命を大切にし、守りたいもののために精いっぱい生きてみようと思いました。

対象作品／住野よる著『また、同じ夢を見ていた』双葉社

中学校三年の部　佳作

私の幸せ

弘前市立南中学校　対馬　蘭

「幸せは、あっちからやってくるものではなく、こっちから、選んで手にするものだから。」

主人公である友達がいない「私」は、尻尾の短い猫の「彼女」と共に、綺麗なお姉さんの「アバズレさん」、笑顔の素敵な「おばあちゃん」、手首に傷のある高校生の「南さん」に助言をもらいながら、国語の授業で、幸せとは何かについて考えていく。

授業参観日が近づき、自分のかしこい様子を両親に見てもらえると楽しみにしていた「私」だったが、両親共に仕事で行けなくなってしまったことを、母から伝えられる。思わず母を傷つける言葉を言ってしまった。次の日「南さん」にそのことを話すと、返ってきた答えは「謝れ」。もう二度と親に謝ることのできなくなった「南さん」は、自分を「私」に重ねていた。

私は、その時すぐに母に謝ることのできなかった「私」を、なんてわがままなのだろうと思った。

では、私自身はどうだろう。

この本を読む前の私は、他の人たちよりも自分の方が「優秀」だと思っていた。私の思う「優秀」とは、テストの点数

が高い、字が綺麗、絵が上手、足が速い……。私がこのように思い込むようになった理由はたった一つ。大人にほめられるから。ほめられる人は「優秀」。この自分の中だけの「優秀」が、私は全て当てはまっていた。私の幸せとはと問われたら、自分の「優秀さ」だと、胸をはって答えていただろう。

私はよく、感情まかせにものを言ってしまうことがある。最近では母に、

「お母さんとは二度と一緒に出かけない！」

と言った。母は私にこう返した。

「お母さんはそれでもいいけど、もしお母さんが死んで本当にそうなったら、悲しむのはあなただよ。」

と。その時私は、それは嫌だと思った。私は本当に母と出かけたくないわけではない。ただ、母を少し困らせたかっただけだ。こんなちっぽけな反抗、一言謝れば済むことだ。しかし私は、たったそれだけのことができなかった。私は思う。こんなことも謝ることのできない私は、人として「優秀」なのだろうか。

さて、クラスメイトにバカにされ、不登校になってしまった隣の席の「桐生くん」の家に行き、自分は味方だ、一緒に戦おう、と「私」は言う。しかし戦おうとしない彼に「いくじなしっ！」と怒鳴ると、「嫌いだ！皆、嫌い！だけど小柳さん（「私」）が一番嫌いだ！」と言われてしまう。この言葉に心が真っ暗になってしまう「私」と共に、私も心が真っ暗になった。なぜなら、自分が「一番嫌いだ！」と言われた気分になったからだ。

私は、小・中学校どちらも真面目に部活動に取り組んだ。それはとても「優秀」なことだと思っていた。生徒会長や部長になり、私のそういう意識は、より強くなっていった。ある日の部活動中、顧問の先生に言われた。

「お前、自分が他の人より優秀だと思っているだろ。」

図星だった。しかし、まさか、それが人を見下すような態度にまで出ているとは思いもしなかった。それから私は先生に、何度も同じようなことを言われた。私は苦痛だった。こんなにも自分が否定されたことはなかった。もう逃げ出したくて、逃げ出したくて、たまらなかった。そして、ある時先生に言われた。

「あなたは何でもできるわけじゃない。何でもできる人はいないんだ。だから自分のできることをすればいいんだよ。」

と。私は解放された気分になった。

自分も「一番嫌いだ！」と言われたような気分になったのは、私も「私」と同じように人を見下していたからだ。私の考えていた「優秀」は、間違っていたのだ。逆に、自分を苦しめてしまっていた。私はそう思った。

私は、何年も「優秀」ということについて間違った考えを持ち続けていたことに気づくことができた。私の今の幸せは、この間違いに気づけたことだ。

幸せとは、自分が嬉しく感じたり、大切な人を大事にしたり、自分のことを大事にしたり、そういった行動や言葉を、自分で選べることだと、この本を読んで気付くことができた。そして、「アバズレさん」や「南さん」、「おばあちゃん」のように、私の周りにも幸せについて教えてくれる人達がいる。

私はまた間違ってしまうかもしれない。しかし、それを乗り越えながら、私自身の幸せを見つけていきたい。そして、いつか私も、今の私のように間違ってしまった人を幸せへと導いてあげられる人になりたい。

応募作品審査講評

小学校三年の部

野村　聡

今回三年生の部を審査させていただいて感じたことは、四十編の応募作品がどれも力作ばかりで、そこから数編だけの入賞作品を決めるのは正直大変難しいということでした。読書というすばらしい体験を自分なりの言葉で表現するだけでも価値のあることですから、応募された三年生のみなさんには、ただ頭が下がる思いです。

対象図書で一番多かったのは物語で、次は伝記でした。ノンフィクションもありました。どの分野の図書でもワクワクドキドキしたり涙ぐんだり、新しい発見をしたりと、読書を心から楽しんでいることが分かりました。

第一席、桑村大智さんの「命とお金の大切さ」は、お金の使い道に迷う主人公の気持ちに寄り添いながら、物語の五百円玉を「神様から心をもらった五百円玉」と考えて、お金よりも大切な「命」を学んだことがよく分かる感想文です。感想文を読む人に呼びかける文を入れるなどの工夫も成功しています。

第二席、齋藤莉緒さんの「音楽室の日曜日」は、物語を「ウキウキ」して読んだだけでなく「感動」も与えてくれたと書いて、感動の中心を「自信をもつこと」「仲間の大切さ」とまとめています。物語を楽しむだけでなく、そこから何を学んだかがよく分かります。自分の経験を重ねているので感動がよく伝わります。

第三席、小堀和華さんの「『一〇〇万回生きたねこ』を読んで」は、小さい頃から繰り返し親しんできたこの本の「読みやすさ」をよく伝えるとともに「相手を好きになる気持ち、しあわせ、かなしみ」という主題をとらえています。

佳作、阿保空斗さんの「『最後のオオカミ』を読んで」は仲間との絆の大切さや戦争のむごさを、造田陽央里さんの「『お昼の放送の時間です』を読んで」はふだんは気付かない相手の人のよさを感じる大切さを、對馬璃音さんの「大切なもの」は物語の中に自分の経験を感じて大切な物に気付いたことを、それぞれ感想として素直に表現しています。

今回も応募作品はどれも、読むきっかけ→あらすじの紹介→心に残った場面→自分の経験と比べる→これからの生き方、考え方。という流れをしっかりとおさえていました。これに入賞作品のような「みなさんは○○を～～しますか?」などの書き出しの工夫や読者への呼びかけの文が加わるととてもよい感想文になると思います。また本の中の本文からの短い引用も時には効果的です。読書感想文の書き方にはいろいろと大切なことが多くありますが、まず、自分が感動したことを表現する場合に、必ずその文章を読んでくれる人がいるということを意識してみましょう。そうすることで自然と文章は変わってくると思います。これからに大きな期待を寄せます。

小学校四年の部

福田文浦

今年の四年生の応募点数は、三五点と昨年より少なかったものの、力作ぞろいで選ぶのに大変苦労しました。本での体験を自分の体験に引き寄せて考えている作品が、とても多く感心しました。そこで、できるだけ自分の言葉で体験を書き表していると思える作品を選びました。その本の面白さを書き表し、物語を楽しんでいるなあと思える作品は、読んでいても楽しく、その本の楽しさがしっかりと伝わってきました。

第一席の山口青空さんは、自分の今の生活と本の中での生活を比べていました。自分の生活とはあまりに違う「通学路」に驚きます。自分にとっては、楽しいともいえる「通学路」なのに、外国の子どもたちは、川や山、がけなどの危ない道を通り、必死に命を懸けて通学しているのです。「どうして学校に行くのだろう」というところまで考えたところが山口さんらしいと思いました。

第二席の丹代音澄さんもまた、自分の生活と西アフリカの国ブルキナファソに暮らす女の子の生活とを比べ、そのあまりの違いに驚きます。一番心に残ったのは、お手伝いの量の多さ、また、その種類の多さ。自分の当たり前がブルキナファソでは当たり前ではないことを知りました。違いに驚くだけではなく、良い点をも見つけて、「まねをしたい」と思った丹代さんの視点にも感心しました。

以上の二つの作品は、読書によって全く知らなかった世界に連れていってもらい、改めて自分の今の生活を振り返るきっかけになったと言えるでしょう。読書は、自分の世界を広げてもくれるのです。

第三席の伊藤咲結さんは、一年生の時に学習した「お手紙」のかえる君とがまがえる君シリーズを読み、二人の仲の良さについて考えます。自分が一年生の時に感じたかえる君の優しさ。四年生の自分もまた、がま君の行動に優しさを感じます。どんなところに優しさを感じたのか、素直な言葉で書き表しているところに好感がもてました。

同じシリーズの作品や同じ本でも、読んだ時の年齢によって感じることが変わったり、違ったりすることがあります。年代を超えて読む楽しさがある、それが読書の面白さともいえそうです。

佳作や努力賞の作品にも、素晴らしい作品が多くありました。面白さが伝わるあらすじの書き方に感心した作品。ハッとするような書き出しに魅かれた作品。主人公を自分に引き寄せて考えた作品。シンプルながら伝えたいことが伝わる作品。戦争という重いテーマながら、ありきたりの感想ではなく、自分が何を考えたかをしっかりと書いた作品。自分の経験と重ねることで深く読み取ったことが感じられる作品。

弘前市の四年生の読書体験を一緒に味わうことができ、貴重な体験となりました。

小学校五年の部

猪股　健

今年度も小学校五年生の読書感想文の審査をさせていただきました。応募したみなさんに失礼のないように、二度、三度としんちょうに読ませていただきました。

五年生の部には全部で五十四編の応募がありました。昨年度は三十四編でしたので、昨年度よりも二十編多い応募となっており驚きました。

第一席は林大晴さんの「正義のヒーローとは」です。アンパンマンの作者であるやなせたかしさんが、なぜ、空腹の人に顔をちぎって与えるヒーローを作り上げたのかを読み取った上で、「正義」という言葉の意味を自分なりに考えたことが素晴らしかったです。自分が見たニュースを話題にして、「正義」について考えてみたところには説得力がありました。ややまとめの部分が弱かったのですが、書き出しの工夫、構成の工夫がそれを補っていましたし、本の題名でもある「何のために生まれてきたの」という問いを、自分自身にあてはめて考えたところにも、この本を読んだ価値があったと思います。

第二席は佐々木理子さんの「苦しくても最後まで精一杯がんばる」です。障害のある三兄弟の様子を読んで、障害者はできないこともあるけれど、できることを増やそうとがんばっているということを学んでいました。また、自分自身の行動を振り返り、自分も精一杯生きよう、と考えてみたところがよかったです。

第三席は立田美月さんの「『星の王子さま』を読んで」です。ややあらすじを追う形になっていましたが、場面ごとに登場人物の思いを想像しながら読んでいました。物語に登場したキツネから学んだことも多かったようですが、キツネのように友達を大切にする心をもって友達に接していこうという考えをもったことがよかったと思います。

審査をしてみて残念に思ったこともあります。それは、ただ、本のあらすじにしたがって思ったことをならべているだけの作品が非常に多かったということです。また、夏休みの宿題の一つとして取り組んだ人がほとんどだと思うのですが、書いた文章を全く推こうせず、清書もせずに出した作品も多く見受けられました。

高学年になると本を読んで思ったことだけではなく、そこに自分の経験を重ねて、本から学んだこと、考えたことを読書感想文に書いてほしいと思います。今後は、たくさんの本から、たくさんのことを学んでほしいと願っております。

小学校六年の部

福田真実

「本の力」を生きるエネルギーへと変えた作品、六十七編と出会いました。小学校を終える区切りのひとつとして、本に向き合い、自分に向き合う行為の尊さに思いをはせます。

「本の力」とはどのようなものでしょう。それは、人物の力であり、言葉の力であり、場面の力です。「わたしの好きな人物は…」「ぼくの心に残った言葉は…」「わたしにとって印象的な場面は…」。これらの文の背景にあるのが「本の力」です。その力を生きるエネルギーへと変えるのは、そのときのみなさんの状況であり、心の在りようです。例えば、今回の応募の中には、同じ本を対象とした作品がいくつかありました。しかし、生み出された感想文には異なるエネルギーがつづられています。受け手の状況と心の在りようで、「本の力」は姿を変えるのです。生きるエネルギーへの高まりが際立った作品と、その中に見える「本の力」を以下に紹介します。

第一席。登場人物に自分を重ね合わせながら、自分自身の迷いや揺れる気持ちをリズム良くつづった作品です。本の世界に浸り、考え、前を向いて進もうとする筆者の姿そのものが光ります。マイナスをプラスに変えていく本の力を感じさせます。

第二席。心に残った文章を自分の中でしっかりと消化させていることが伝わってくる作品です。作品後半でつづられる自分自身の日々の経験が、「キャスト」という仕事に奥行きを与えています。透明感のある筆者の心が、本の力をさらに輝かせています。

第三席。本から受け取ったことをタイトルで明確に示した作品です。辻井さんに対する以前のイメージと、読後のイメージとの対比を自分の決意にまで高めています。読者の背中を優しく、力強く押してくれる本の力を表現しています。

佳作。福村さんは、いくつもの心に残る言葉を、自分の生活に照らし出しています。ノンフィクションだからこそ、ストレートに届く本の力を教えてくれています。大湯さんの作品には、登場人物の気持ちにぴったりと寄り添う眼差しがあります。心を揺さぶられる場面が読者をそっと導いてくれる本の力が伝わります。荻野さんは、アンネの置かれた状況と言葉から、社会、世の中の人々に対する思いをつむぎ出しています。ものの見方・考え方が時代を超えて受け継がれていく本の力に圧倒されます。造田さんの作品は、感想文であると同時にメッセージにもなっています。国語の教材からつながって、次々と世界が広がっていくのも本の力です。

想像してみます。今回、みなさんが対象とした本を五年後、十年後にもう一度読んだとき…。読後に生まれるエネルギーは間違いなく今とは異なるはずです。同じ本でも「本の力」は姿を変えます。読み手であるみなさんの状況と心の在りようがそうさせるのです。それを人は「成長」と呼びます。

中学校一年の部

中村　真木子

「読書感想文を書いてきてください。」と学校の先生は気軽に言いますが、よく考えると「読書感想文」とは、二種類の違うことを伝えなければならない特殊な文だと思います。一つは、「感想・意見」を書く文であり、もう一つは「どんな本（あるいはその本のどの部分）を読んでそう思ったか」説明をする文です。

「意見・感想」は、本を読んで何かしらの思ったことがあれば書けるでしょう。「本について」の説明も「こんな本です。ストーリーは、心に響いたのは…」などと書きだせば何とかなりそうです。ただ、この二つをうまく混ぜ合わせて、読書感想文を読む人に「自分の感じたこと」を伝えるのは簡単なことではありません。今回の選考は、この二つが調和しつつ、書き手の言いたいことが伝わる読書感想文になっているのか、そして、感想文を読み終わった後に、書き手の姿や姿勢が思い浮かぶかを頭において選ばせていただきました。

第一席の「ある晴れた夏の日」は、人類が犯した過ち、戦争について、一年生ながら正面から四つに組んだものでした。本の中の、原爆投下は必要だったかどうか繰り広げられるディベートから、日本が他国に与えた惨劇やナチスドイツとの同盟、負けを認めない軍の暴走といった事実を受け止め、さらに、自分からアメリカの原爆開発者の動画を探して違う立場だったらどう見えるのか深く探った鎌田さんは、「平和の創造」に携わる一人でいたいとの結論に至ります。本から得た事実、自分で探した別の視点、平成三十年八月の広島と長崎の人々の思い、すべてが束ねられての結論に、鎌田さんの力強い思いを感じました。

第二席の「善と悪の選択」は、『羅生門』の紹介から始まります。その後、不自由のない現代の生活の中、自分は生ぬるい正義の下に生きていて、将来待ちかまえているかもしれない辛い選択に真剣に立ち向かえるかと自問が続きます。下人の心情も汲み取りながら、自分はどんな選択をしたいか、生きる苦労を真摯に受け止められるか、齋藤さんの葛藤を潜りぬけた後の潔い眼差しが見えるようです。

第三席の「和菓子、洋菓子、はなやかなのは？」は、読書をしながら、その本の中に入り込み、一緒に笑ったり憤慨したり、主人公や作者の言葉に共鳴しているのがよくわかる感想文でした。和菓子派の小島さんと洋菓子派の小島さんの脳内対決は接戦のようですが、この感想文を読めば、和菓子の名前から日本語の奥深さにたどり着き、和菓子のはなやかさを伝えたいと思った小島さんに賛同する人も多くなるのではないでしょうか。

読書感想文は、ほんの少し料理に似ているかもしれません。本という材料と、読んだ人の思いを伝える文章とが、ちょうどいい塩加減＝「塩梅」で作り上げられたとき、読んだ人に染みていきます。これからもたくさんの人に、本を読んで思ったことを、文章であれおしゃべりであれ、誰かに伝えるということをしてほしい、と思いました。読書のおいしさの輪はきっとそうやって広がっていくのですから。

中学校二年の部

鈴木敏浩

中学校二年生の部には五十二編の応募があり、年々応募数が増加しており、それが読書への関心の高まりを示すものであれば、大いに歓迎したいと思います。後にも述べますが、気に入った本に出会い、感動や想いを巡らせることは人生を豊かにしてくれるはずです。今回応募された皆様のさらなる飛躍を期待しております。

さて、作品の講評ですが、第一席は『火垂るの墓』を対象とした、三浦夏帆さん（附属中学校）の作品です。戦争の中を生き抜く人々の精神状態に着目し、戦争とは人々から優しい心を取り上げてしまう行為だという自分なりの結論を導き出しています。そこに至る過程が自分への問いかけの形でていねいに綴られています。あえて難題である「戦争の意味」を自分に問いかけた点で評価します。

第二席は『一〇五度』を対象とした、川村勇太さん（附属中学校）の作品です。書き出しが魅力的なこの作品。文体も力強く素直で読むものを引きつける書き方が見事です。テーマを自分の夢の実現と、そこに立ちはだかる父との関係として捉え、最後には自分の問題としてしっかり結論づけてまとめています。

第三席は『代筆屋』を対象とした、北山沢さん（附属中学校）の作品です。あまり感情を外に出さない自分に照らして「手紙（代筆）」について思いを巡らせています。祖母と死んだ孫のエピソードを通じて考察する中に、沢さんの人柄がにじみ出ているように感じました。他にも、本誌に掲載できませんでしたが、この作品を対象として多くの方が想いを巡らせてくれました。そのどれもが、書き手の思いや個性が強く表現されていたと思います。

さて、今回、審査の中で感じたことは、応募作品の多くが、単にあらすじの筆記にとどまらず、その内容を自分自身のこととして置き換えて、心の中で試行錯誤している作品が多く見られたということです。

小説家の森絵都さんは、読書について「もしあなたが本の中で心から共鳴できる誰かと出会ったら、それは自分の外側ではなく、内側に友達を作ったということです。」と述べています。その友達が「あなたと共に悩み、答えを求めてくれる強力な味方」になってくれるとも述べています。（注）

さあ、来年は三年生。読書を通じて、あなたの心の中に、あなたと共に悩み、助けてくれる仲間を作りましょう。そんな仲間作りとしての豊かな本との出会い。そして、仲間との想いを綴った感想文の応募に期待しています。

注・光村図書「国語3」森　絵都　著「ためになるってどんなこと?」より引用

中学校三年の部

竹内　徹

読書感想文コンクール応募学校と応募作品点数の推移を見ますと、今年度は昨年度に比べて、応募学校数は一校減って八校で、応募作品数は十三作品増え、五十八作品でした。ここ八年間では二番目に多い作品数です。皆さんが、この文集『はと笛』に掲載された多くの作品を読んで、今までに読んだことのある本も、読んだことのない本も、それぞれが読書の楽しみに結び付く可能性をもっていますから、この文集『はと笛』が、あなたの読書生活をさらに広げてくれるものと思います。

第一席　いつだって〝人間〟であるために

題名を聞いたことがあり面白いらしいと、軽い気持ちで読み始めた作品から、小島さんは大切なことを教えられました。「尊大な羞恥心」「臆病な自尊心」の二つに飲みこまれて文字に纏われた獣になってしまった李徴に向けて「素直に努力すればよかったのだ」と語る言葉が、そのまま自分に跳ね返ってきます。心の猛獣たちをつなぎとめるものを持っていることが、自分が「人間」でいる意味だと考え、前向きに進んでいく心と向き合うことができた作品でした。

第二席　彼に手紙を書けるなら

人間の感情のもどかしさを強く訴えかける文章がどうしても気になって手に取った『手紙』でした。兄のせいで自暴自棄になってしまう弟に同情しつつも、実は大事な決断ができなかった弟の方にも振り返るべき点があったのではないかと西田さんは考えました。そして、兄の真の願いに気付き、弟を思う兄の愛を忘れないでほしい、という願いを込めた手紙を、兄の手紙に添えて弟に届けたいと思っています。

第三席　にじいろガーデン

登場人物に同性愛者が出てくることに衝撃を受けた佐藤さんですが、本書を読み進め差別や偏見を改めることになりました。人と関わり、人のよいところを見つけるために一生懸命であること、家族には年齢・性別は関係ないこと、家族とは大切な人と作りあげていくものだということを知ることに繋がった作品との出会いでした。

多くの本が、あなたが手に取ってくれるのを待っています。学校の図書館にどんな本があるのか見に行きましょう。また、弘前市立図書館に足を運んでみましょう。本屋さんに立ち寄ってみましょう。本との出会いは、人との出会いとも重なります。作者・筆者との出会い、主人公との出会い、登場人物との出会いなど、多くの出会いがあなたの成長を後押ししてくれるものと思います。

○努力賞一覧

☆小学校三年の部

弘前市立福村小学校	古川　舞桜
弘前市立福村小学校	石郷岡　悠乃
弘前大学教育学部附属小学校	長谷川　之和

☆小学校四年の部

弘前市立大成小学校	田中　幸実
弘前市立堀越小学校	外崎　みつき
弘前市立福村小学校	中畑　結衣

☆小学校五年の部

弘前市立時敏小学校	原田　健
弘前市立大成小学校	山内　謙心
弘前市立高杉小学校	山本　琴奏

☆小学校六年の部

弘前大学教育学部附属小学校	三上　莉礼
弘前大学教育学部附属小学校	成田　歩未
弘前市立文京小学校	神　さくら
弘前市立朝陽小学校	成田　心優

☆中学校一年の部

弘前市立第一中学校	佐々木　まこ
弘前市立第一中学校	宮内　琉蘭
弘前市立第一中学校	工藤　乃愛
弘前大学教育学部附属中学校	田中　ななみ

☆中学校二年の部

弘前大学教育学部附属中学校	三ツ谷　虹珠
弘前大学教育学部附属中学校	髙橋　花香
弘前大学教育学部附属中学校	福島　凛乃
弘前市立津軽中学校	石田　乃々
弘前市立第二中学校	小田桐　佑

☆中学校三年の部

弘前市立第一中学校	千葉　未優梨
弘前市立第三中学校	工藤　理映子
弘前市立第四中学校	石岡　翼

○感想文の対象となった図書

☆小学校三年

〔書名〕　〔著者名〕　〔発行所〕

魔女の宅急便　角野栄子　徳間書店
14ひきのかぼちゃ　いわむらかずお　童心社
百万回生きたねこ　佐野洋子　講談社
ハーブ魔女のふしぎなレシピ　あんびるやすこ　ポプラ社
日ようびのどうわ　手袋を買いに　新美南吉　国土社
最後のオオカミ　マイケル・モーパーゴ　文研出版
ホッキョクグマの赤ちゃんを育てる！　円山動物園のねがい　高橋うらら　ポプラ社
SWITCH！シリーズ　アリ・スパーク　フレーベル社
ルルとララのきらきらゼリー　あんびるやすこ　岩崎書店
わたしたちの地球環境5　自然保護は、いま　ジョン・ホーソン 小峰書店
10分で読める発明・発見をした人の伝記　塩谷京子　学研プラス
おじいちゃんがおばけになったわけ　キム・フォップス・オーカソン　あすなろ書房
音楽室の日曜日　歌え！オルガンちゃん　村上しいこ　講談社
コミック版世界の伝記11　コロンブス　摩耶美紗樹　ポプラ社
かいけつゾロリたべられる!!　原ゆたか　ポプラ社
コミック版世界の伝記35　ゴッホ　フカキショウコ　ポプラ社
コミック版世界の伝記31　クララ・シューマン　迎夏生　ポプラ社
LEDのひみつ　谷豊　学研プラス
かいけつゾロリのおいしい金メダル　原ゆたか　ポプラ社
すごいね！みんなの通学路　ローズマリー・マカーニー　西村書店
いのちは見えるよ　及川和男　岩崎書店
お昼の放送の時間です　乗松葉子　ポプラ社
セロ弾きのゴーシュ　宮沢賢治　福武書店
あのころ（ツチノコ騒動）　さくらももこ　集英社
マリモを守る。若菜勇さんの研究　千葉望　理論社
子どもの伝記7　ヘレン・ケラー　砂田弘　ポプラ社
とびらをあければ魔法の時間　朽木祥　ポプラ社
コミック版世界の伝記4　ヘレン・ケラー　山田せいこ　ポプラ社
魔女とふしぎな指輪　ルース・チュウ　フレーベル館
ごめんねともだち　内田麟太郎　偕成社
かあちゃん取扱説明書　いとうみく　童心社
検証！歴史ミステリー4　モナ・リザは2人いた？　河合敦　学研教育出版
名犬ラッシー　エリック・ナイト　講談社
まいごのビーチサンダル　村椿菜文　あかね書房
めいちゃんの500円玉　なかがわちひろ　アリス館
ナイチンゲール　赤十字の母　村岡花子　講談社

☆小学校四年

〔書名〕　〔著者名〕　〔発行所〕

10歳までに読みたい世界名作7　小公女セーラ　フランシス・ホジソン・バーネット　学研教育出版
カエルのメロン　鬼村テコ　刈谷市教育委員会
大どろぼうホッツェンプロッツ　プロイスラー　偕成社
しっぱいにかんぱい　宮川ひろ　童心社
クレジットカードのひみつ　鶴川たくじ　学研パブリッシング
コミック版世界の伝記4　ヘレン・ケラー　山田せいこ　ポプラ社
パオズになったおひなさま　佐和みずえ　くもん出版
カモのきょうだいクリとゴマ　なかがわちひろ　アリス館
耳の聞こえないメジャーリーガー　ウィリアム・ホイ　ナンシー・チャーニン　光村教育図書
ぼくとテスの秘密の七日間　アンナ・ウォルツ　フレーベル館
心の森　小手鞠るい　金の星社
お話きかせてクリストフ　ニキ・コーンウェル　文研出版
ここがわたしのおうちです　アイリーン・スピネリ　さ・え・ら書房
一歩一歩タロ〜！ジロ〜！南極物語　チーム151E　学研教育出版
捨て犬・未来と捨てネコ・未来　今西乃子　岩崎書店
推理・探偵傑作シリーズ18　ゆうれい殺人事件　クレイトン・ロースン　あかね書房
黒魔女さんが通る!!　石崎洋司　講談社
エルマーのぼうけん　R・S・ガネット　福音館書店
ニルスのふしぎな旅　上／下　セルマ・ラーゲルレーグ　福音館書店
風のロンリー　河相美恵子　国土社
ココロ屋　梨屋アリエ　文研出版
すごいね！みんなの通学路　ローズマリー・マカーニー　西村書店
五体不満足　乙武洋匡　講談社
森のおくから　むかし、カナダであったほんとうのはなし　レベッカ・ボンド　ゴブリン書房
転んでも、大丈夫　臼井二美男　ポプラ社
エジソン　努力とひらめきの発明王　早野美智代　学研プラス
宮沢賢治童話傑作選　銀河鉄道の夜　宮沢賢治　偕成社
ヘレン・ケラー物語　東多江子　講談社
ふたりはともだち　アーノルド・ローベル　文化出版局
世界の子どもたち32　ブルキナファソ　M・マエノ　偕成社
最後のオオカミ　マイケル・モーパーゴ　文研出版
びりっかすの神さま　岡田淳　偕成社
ななしのごんべさん　田島征彦・吉村敬子　童心社

☆小学校五年

〔書名〕　〔著者名〕　〔発行所〕

キミと、いつか　宮下恵茉　集英社

目がみえない耳もきこえない　でもぼくは笑っている
佐々木志穂美　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
ムーミン谷の夏まつり　トーベ・ヤンソン　講談社
せんそうってなんだったの？語りつぎお話絵本　ほんとうに
あった４つのお話　田代脩監修　学研教育出版
校長先生、がんになる　小林豊茂　第三文明社
ぼくは満員電車で原爆を浴びた
米澤鐵志語り・由井りょう子文　小学館
ダーウィンと進化論　その生涯と思想をたどる
クリスタン・ローソン　丸善
「のび太」という生き方　横山泰行　アスコム
ゆず先生は忘れない　白矢三恵　くもん出版
リアル鬼ごっこ　山田悠介　小学館
こちらパーティー編集部っ！
深海ゆずは　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
ぼくと戦争の物語　漆原智良　フレーベル館
ミラクルラブリー♡感動のどうぶつ物語
青空純編著　西東社
西の魔女が死んだ　梨木香歩　新潮社
10歳までに読みたい世界名作13　ひみつの花園
Ｆ・Ｈ・バーネット　学研プラス
絶望鬼ごっこ1　とざされた地獄小学校　針とら　集英社
岩波の愛蔵版星の王子さま　サン・テグジュペリ　岩波書店

ロザリオの祈り1　長崎の原爆を生きぬいて
かいともみ　教育出版センター
アンネ・フランク　平和を願いつづけた悲劇の少女
大塚信　集英社
走れメロス　太宰治　西加奈子編　講談社
横綱白鵬　試練の山を越えてはるかなる頂へ
小松成実　学研教育出版
幽霊バスツアー　あいにおまかせ!?　赤川次郎　集英社
さいごの夏、きみがいた。　西本紘奈　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
きかせたがりやの魔女　岡田淳　偕成社
電池が切れるまで　宮元雅史　角川学芸出版
明日をつくる十歳のきみへ　一〇三歳のわたしから
日野原重明　富山房インターナショナル
奮闘するたすく　まはら三桃　講談社
何のために生まれてきたの？　希望のありか
やなせたかし　ＰＨＰ研究所
男子弁当部　イノウエミホコ　ポプラ社
二分間の冒険　岡田淳　偕成社
君の膵臓をたべたい　住野よる　双葉社
名探偵シャーロック・ホームズ　コナン・ドイル　岩崎書店
佐賀のがばいばあちゃん　島田洋七　徳間書店
ぼくらのミステリータウン8　学校から消えたガイコツ
ロン・ロイ　フレーベル館

銀河鉄道の夜　宮沢賢治　岩崎書店
ぼくらのミステリータウン11　名画と怪盗オレンジ　ロン・ロイ　フレーベル館
10歳までに読みたい世界名作7　小公女セーラ　F・H・バーネット　学研教育出版
捨て犬・未来と捨てネコ・未来　今西乃子　岩崎書店
ドラゴン・スレイヤー・アカデミー　ケイト・マクミュラン　岩崎書店
おんなのこのでんきえほん　堀米薫　西東社
ざんねんないきもの事典　今泉忠明　高橋書店
ふしぎな声のする町で　ほしおさなえ　徳間書店
注文の多い料理店　宮沢賢治　偕成社
天使と悪魔　ダン・ブラウン　角川書店
とべないほたる　小沢昭巳　ハート出版
マララ　マララ・ユスフザイ　岩崎書店
89番めのネコ　エレノア・ニルソン　国土社

☆小学校六年

〔書名〕　〔著者名〕　〔発行所〕

あきらめないこと、それが冒険だ　野口健　学習研究社
ぼくと未来屋の夏　はやみねかおる　講談社
天使のいる教室　宮川ひろ　童心社
ワンダー　R・J・パラシオ　ほるぷ出版
バケモノの子　細田守　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
かあちゃん取扱説明書　いとうみく　童心社
捨て犬・未来と捨てネコ・未来　今西乃子　岩崎書店
いい人ランキング　吉野万理子　あすなろ書房
ぼくらの心霊スポット　あさのあつこ　学習研究社
オリンピックのアスリートたち　錦織圭　本郷陽二　汐文社
ぼくの、ひかり色の絵の具　西村すぐり　ポプラ社
猫の恩返し　柊あおい　徳間書店
君たちはどう生きるか　吉野源三郎　マガジンハウス
家庭教室　伊藤歌詞太郎　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
脱走ペンギンを追いかけて　山本省三　佼成社出版
億男　川村元気　文藝春秋
ぼくらの七日間戦争　宗田理　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
ぼくとベルさん　友だちは発明王　フィリップ・ロイ　ＰＨＰ研究所
キャプテン　ちばあきお　学研プラス
手塚治虫　少女まんがの世界　石子順　童心社
ここがわたしのおうちです　アイリーン・スピネリ　さ・え・ら書房
ふしぎ駄菓子屋銭天堂　廣嶋玲子　偕成社
雨ふる本屋の雨ふらし　日向理恵子　童心社
恐竜世界のサバイバル　ホン・ジェチョル　朝日新聞出版社
火垂るの墓　野坂昭如　徳間書店
恐怖コレクター　佐東みどり　ＫＡＤＯＫＡＷＡ

未来からの宿題　藤岡照也 全国LPガス協会
アンネフランク物語　小山内美江子　講談社
若草物語　オルコット　学研教育出版
小公女　バーネット　学研教育出版
宮沢賢治童話全集4　注文の多い料理店　宮沢賢治　岩崎書店
宮沢賢治童話全集11　銀河鉄道の夜　宮沢賢治　岩崎書店
ふしぎやさん　林原玉枝　アリス館
椋鳩十の愛犬物語　椋鳩十　理論社
国語なんでも辞典シリーズ　桑原博史　金の星社
シートンどうぶつ記　ギザ耳ウサギ　小林清之介　あすなろ書房
水素社会ここが知りたい！　清水めぐみ　文藝春秋
スペシャルガール　リベリアの少女と日本の看護師の物語　沢田俊子　汐文社
森は生きている（自然と人間）　富山和子　講談社
ぼくは満員電車で原爆を浴びた　由井りょう子　小学館
ぼくらが作ったいじめの映画　今関信子　佼成出版社
雨ふる本屋　日向理恵子　童心社
「のび太」という生きかた　横山泰行　アスコム
コミック版日本の歴史　武田信玄と上杉謙信　すぎたとおる　ポプラ社
きっときみに届くと信じて　吉富多美　金の星社

五月は花笠！　3年1組ものがたり（2）　後藤竜二　新日本出版社
奮闘するたすく　まはら三桃　講談社
ディズニー　そうじの神様が教えてくれたこと　鎌田洋 SBクリエイティブ
坊っちゃん　夏目漱石　新潮社
よりみち3人修学旅行　市川朔久子　講談社
クニマスは生きていた！　池田まき子　汐文社
ホイッパーウィル川の伝説　キャッシー・アッペルト、アリス・マギー　あすなろ書房
世の中への扉　ピアノはともだち　奇跡のピアニスト　辻井伸行の秘密　こうやまのりお　講談社
二分間の冒険　岡田淳　偕成社
電池が切れるまで　宮本雅史 KADOKAWA
ひめゆり　ひめゆり平和祈念資料館　沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団
弱くても勝てます　開成高校野球部のセオリー　高橋秀実　新潮社
キッチン（ムーンライト・シャドウ）　吉本ばなな　幻冬舎
コミック版　日本の歴史11　幕末・人物維新伝　坂本龍馬　すぎたとおる　ポプラ社
まけるなしんちゃん　東海林のり子　ポプラ社

☆中学校一年

〔書名〕	〔著者名〕	〔発行所〕
ワンダー	R・J・パラシオ	ほるぷ出版
ソーリ！	濱野京子	くもん出版
聲の形	川崎美羽	講談社
永遠の0	百田尚樹	講談社
青空と逃げる	辻村深月	中央公論新社
毎日かあさん	西原理恵子	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
妄想かもしれない日本の歴史	井上章一	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
ゆきうさぎのお品書き6時20分の肉じゃが	小湊悠貴	新潮社
少女	湊かなえ	早川書房
くちぶえ番長	重松清	新潮社
塩狩峠	三浦綾子	新潮社
ある晴れた夏の朝	小手鞠るい	偕成社
バスケの神様	木崎菜菜恵	集英社
コミック版　世界の伝記	アンネ・フランク	
	若宮あずさ	ポプラ社
さよならドビュッシー	中山七里	宝島社
超ビジュアル！日本の歴史人物大事典	矢部健太郎	西東社
吹部！	赤澤竜也	飛鳥新社
キミがいなくなるその日まで	永良サチ	スターツ出版
おおかみ子どもの雨と雪	細田守	ＫＡＤＯＫＡＷＡ

ソード・アート・オンライン・プログレッシブ	川原礫	アスキー・メディアワークス
ものかんづめ		さくらももこ　集英社
わが家は祇園の拝み屋さん		望月麻衣　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
億男		川村元気　文藝春秋
原爆ドームの祈り		長谷川敬　講談社
12星座		石井ゆかり　ＷＡＶＥ出版
聞け、〝てるくはのる〟よ		中村聖志、中村唯子　新潮社
天国までの49日間		櫻井千姫　スターツ出版
ナミヤ雑貨店の奇蹟		東野圭吾　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
8年越しの花嫁		時海結似　小学館
よだかの片想い		島本理生　集英社
走れメロス		太宰治　講談社
青の数学		王城夕紀　新潮社
ズッコケ中年三人組		那須正幹　ポプラ社
聖の青春		大崎善生　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
この世界の片隅に		こうの史代　双葉社
リセット		如月ゆすら　アルファポリス
鹿の王		上橋菜穂子　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
絶望鬼ごっこ		針とら　集英社
余命10年		小坂流加　文芸社
君たちはどう生きるか		吉田源三郎　マガジンハウス
未成年だけどコドモじゃない		宮沢みゆき　小学館

ただいま！マランダ村　ハンナ・ショット 徳間書店
星の王子さま　サン・テグジュペリ　KKロングセラーズ
三毛猫ホームズ　赤川次郎　光文社
70年分の夏を君に捧ぐ　櫻井千姫　スターツ出版
ぼくらの七日間戦争　宗田理　KADOKAWA
くもの糸・杜子春　芥川龍之介作品集
芥川龍之介　KADOKAWA
十二番目の天使　オグ・マンディーノ 求龍堂
コードブルー　ドクターヘリ緊急救命　安達奈緒子　扶桑社
羊と鋼の森　宮下奈都　文藝春秋
夜が明けたら、いちばんに君に会いにいく
汐見夏衛　スターツ出版
バケモノの子　細田守　KADOKAWA
きみの友だち　重松清　新潮社
和菓子のアン　坂木司　光文社
タマゾン川　多摩でいのちを考える　山崎充哲　旬報社
羅生門　芥川龍之介　新潮社
また次の春へ　重松清　文藝春秋

☆中学校二年

〔書名〕　〔著者名〕　〔発行所〕

十五少年漂流記　ジュール・ベルヌ　講談社
あやかし恋手紙　蒼井紬希　TOブックス
水族館ガール　木宮条太郎　実業之日本社
グランクレスト戦記　水野良　富士見書房
おしまいのデート　瀬尾まいこ　集英社
西の魔女が死んだ　梨木香歩　新潮社
ベンチウォーマーズ　成田名璃子　KADOKAWA
オーバーロード　丸山くがね　KADOKAWA
神様の御用人　浅葉なつ　KADOKAWA
心を整える。勝利を整える56の習慣　長谷部誠　幻冬舎
しっぽをなくしたイルカ　岩貞るみこ　講談社
やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。
渡　航　小学館
君の膵臓を食べたい　住野よる　双葉社
好きになる救急医学　第2版　小林國男　講談社
家庭教室　伊藤歌詞太郎　KADOKAWA
盗賊社会　星新一　新潮社
未来のミライ　細田守　KADOKAWA
野球ノートを書いた甲子園2
高校野球ドットコム編集部　ベストセラーズ
不機嫌な長男・長女　無責任な末っ子たち
五百田達成　ディスカヴァー・トゥエンティワン
天国旅行　三浦しをん　新潮社
ビブリア古書堂の事件手帖
三上延　アスキー・メディアワークス
十字架　重松清　講談社

13歳のシーズン	あさのあつこ	光文社
カラフル	森絵都	文藝春秋
誰も死なないミステリーを君に	井上悠宇	早川書房
吹部！	赤澤竜也	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
友達以上探偵未満	麻耶雄嵩	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
君たちはどう生きるか	吉野源三郎	マガジンハウス
星の王子さま	サン＝テグジュペリ	新潮社
かがみの孤城	辻村深月	ポプラ社
新訳ロミオとジュリエット	シェイクスピア	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
偉大なるしゅららぼん	万城目学	集英社
羊と鋼の森	宮下絵都	文藝春秋
代筆屋	辻仁成	幻冬舎
社会人として大切なことはみんなディズニーランドで教わった	香取貴信	ＰＨＰ研究所
一〇五度	佐藤まどか	あすなろ書房
和菓子のアン	坂木司	光文社
人間失格	太宰治	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
塩狩峠	三浦綾子	新潮社
また次の春へ	重松清	文藝春秋

☆中学校三年

〔書名〕	〔著者名〕	〔発行所〕
ノベライズ版　８年越しの花嫁　奇跡の実話	岡田惠和、国井桂	主婦の友社
君の膵臓を食べたい	住野よる	双葉社
坊っちゃん	夏目漱石	講談社
永遠の０	百田尚樹	太田出版
また、同じ夢を見ていた	住野よる	双葉社
狐笛のかなた	上橋菜穂子	新潮社
月の影　影の海　十二国記	小野不由美	新潮社
精霊の守り人	上橋菜穂子	偕成社
フランダースの犬	ウィーダ	新潮社
名前のない星の物語	藍沢季	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
陽だまりの彼女	越谷オサム	新潮社
告白	湊かなえ	双葉社
きまぐれロボット	星新一	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
幽霊人命救助隊	高野和明	文藝春秋
ひるなかの流星	ひずき優、やまもり三香	集英社
史上最強の哲学入門	飯茶	河出書房新社
君たちはどう生きるか	吉野源三郎	岩波書店
コード・ブルー　ドクターヘリ緊急救命	安達奈緒子	扶桑社
いつか眠りにつく日	いぬじゅん	スターツ出版

か「」く「」し「」ご「」と「住野よる　新潮社
仮面病棟　知念実希人　実業之日本社
細菌汚染　町井登志夫　ＰＨＰ研究所
目撃者　エルンスト・ヴァイス　草思社
小説　魔法使いの嫁　金糸篇
ヤマザキコレ　マックガーデン
夏の庭　湯本香樹実　新潮社
羊と鋼の森　宮下奈都　文藝春秋
君のいない世界　Ｉ．Ｎ．Ａ．　ヤマハミュージックメディア
青の数学　王城夕紀　新潮社
あと少し、もう少し　瀬尾まいこ　新潮社
きみと繰り返す、あの夏の世界　和泉あや　スターツ出版
ソード・アート・オンライン７　マザーズ・ロザリオ
川原礫　アスキー・メディアワークス
傷物語　西尾維新　講談社
偏差値70の野球部　松尾清貴　小学館
あのとき、僕らの歌声は。　ＡＡＡ　幻冬舎
にじいろガーデン　小川糸　集英社
太陽に捧ぐラストボール　高橋あこ　スターツ出版
高校入試　湊かなえ　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
手紙　東野圭吾　文藝春秋
李陵・山月記・弟子・名人伝　中島敦　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
和菓子のアン　坂木司　光文社

塩狩峠　三浦綾子　新潮社
社会人として大切なことはみんなディズニーランドで教わった
香取貴信　ＰＨＰ研究所
君たちはどう生きるか　吉野源三郎　マガジンハウス
無知の日本人　磯田道史　文藝春秋
永遠の０　百田尚樹　講談社

○読書感想文コンクール応募学校と応募作品点数の推移

	小学生の部		中学生の部	
	応募校数	応募作品数	応募校数	応募作品数
第1回	18	230	4	38
2	22	265	5	40
3	22	211	7	51
4	17	222	9	75
5	23	250	10	74
6	19	233	8	64
7	17	197	11	108
8	16	199	8	87
9	16	143	7	60
10	13	79	9	115
11	18	109	8	97
12	13	83	6	109
13	12	80	7	121
14	15	77	9	95
15	16	133	9	139
16	13	125	8	101
17	17	104	8	114
18	17	107	8	113
19	24	132	10	121
20	20	114	9	116
21	21	121	9	151
22	17	69	10	132
23	15	80	11	125
24	15	107	10	121
25	19	137	8	91

	小学生の部		中学生の部	
	応募校数	応募作品数	応募校数	応募作品数
第26回	17	143	10	70
27	16	97	12	82
28	16	73	6	61
29	14	86	8	65
30	16	66	7	78
31	17	67	7	78
32	14	63	7	66
33	16	94	6	60
34	17	97	8	67
35	18	92	8	71
36	17	91	7	54
37	19	87	7	56
38	17	74	7	58
39	19	99	9	70
40	19	116	6	54
41	15	106	7	61
42	17	91	6	88
43	15	84	10	83
44	20	139	9	99
45	17	107	7	95
46	19	143	11	145
47	20	145	11	167
48	18	189	9	114
49	21	196	8	172

○2018年度　第49回読書感想文コンクール応募作品数

	部門別	応募作品数		部門別	応募作品数
小学生	3年 4年 5年 6年	40（38） 35（48） 54（34） 67（69）	中学生	1年 2年 3年	62（28） 52（41） 58（45）
合　計		196	合　計		172

※（　）内は前年・第48回応募作品数

平成30年度　第49回
弘前市小・中学生読書感想文コンクール応募要項

一、趣　旨　本市における読書普及活動の一環として、市内の小・中学校を対象に行うもので、読書に対する関心を高めるとともに、鑑賞力と作文力向上のための一助とします。

二、主　催　弘前市教育委員会

三、後　援　株式会社東奥日報社／株式会社陸奥新報社／アップルウェーブ株式会社／弘前ペンクラブ（順不同）

四、応募要領
(1) 対　象　者　弘前市内の小学校3年生以上の児童及び中学校生徒とします。
(2) 対象作品　感想文の対象とする作品は、文学作品と限らず書籍として発行されているもの。ただし、教科書等に掲載されている作品は対象外とします。
(3) 応募方法　応募原稿は、各校でとりまとめのうえ出品するものとします。
(4) 応　募　先　弘前市立弘前図書館
〒036－8356　弘前市大字下白銀町2番地1
電話32－3794
(5) 締め切り　平成29年9月15日（金）

五、応募原稿
(1) 用　紙　B4判400字詰め縦書き原稿用紙とします。
(2) 筆記用具　原則として鉛筆（BまたはHB）・ボールペン（黒）とします。
(3) 枚　数
小学校 …… 原稿用紙　2～3枚以内
中学校 …… 原稿用紙　4～5枚以内
（公益財団法人全国学校図書館協議会主催　青少年読書感想文全国コンクールに準拠）
(4) 題名等　応募原稿の頭書には、感想文の「題名」と「学校名」・「学年」・「氏名」だけを記載し、他事は記載しないこととします。
以上は、3行以内に収め、4行目から本文に入るものとします。
(5) 使用漢字
①小学校は学年の教育課程に応じたものを用い、学年を超える漢字はふりがなを付けてください。また、人名や地名を除き常用漢字表以外の漢字を使用しないでください。
②中学校は常用漢字表以外の漢字はふりがなを付けてください。
③対象作品の引用は、カッコ書きでそのまま原稿に記入してください。
④入選作品集「文集はと笛2018」の刊行においては、読みやすいようにするため、使用漢字を改変させていただく場合があります。
(6) 応募票　応募原稿には次の事項を記載した応募票を貼付してください。
①感想文の題名　②所属学校名　③学年　④氏名・性別
⑤感想文の対象となった作品に関する書誌的な事項
(7) その他　応募原稿は本人の手書きとし、他のコンクールと重複して応募していないものとします。
※以上の事項を満たしていない作品は、審査から除外することもあります。

六、審　査　応募した作品は、次の7部門に区分し、各部門ごとに第一席、第二席、第三席を各一編、佳作及び努力賞を各数編決定します。
小学校…三学年の部、四学年の部、五学年の部、六学年の部
中学校…一学年の部、二学年の部、三学年の部

七、審査委員（順不同・敬称略）
櫛引　洋一　弘前市立郷土文学館　企画研究専門官
福田　真実　弘前市国語教育研究会（西小）
猪股　健　弘前市国語教育研究会（石川小）
野村　聡　弘前地区小学校学校図書館教育研究会（三和小）
福田　文浦　弘前地区小学校学校図書館教育研究会（大成小）
竹内　徹　弘前地区中学校教育研究会国語部会（第二中）
鈴木　敏浩　弘前地区中学校教育研究会国語部会（相馬中）
中村真木子　弘前地区中学校教育研究会国語部会（裾野中）

八、入選発表　コンクールの審査結果は、各学校へ通知するほか、東奥日報及び陸奥新報紙上、弘前市ホームページで発表します。また、11月24日（土）に弘前市立弘前図書館において表彰式を開催し、入選者に賞状及び賞品を贈ります。

九、入選作品集「文集はと笛2018」
(1) 第一席・第二席・第三席及び佳作に入選した作品は、「文集はと笛2018」へ収録し、小・中学校、県内公立図書館などへ配布します。
(2) 「文集はと笛2018」に収録した作品は、弘前市ホームページにも掲載し、利用者に広くご覧いただくこととします。

十、その他
(1) 応募原稿は、「文集はと笛2018」の配布と同時に返却いたします。
(2) お問い合わせ先　弘前市立弘前図書館　電話32－3794

編集後記

▼本を読んで、思ったことや感じたことを書く。また、その感動が相手に伝わるように文章にする、というのはとても高度なテクニックだと思います。わたしは文章を書くのが苦手です。でも今回、読書感想文コンクールの担当になったご縁で、ご応募頂いた皆さんの作品を読ませて頂きました。そこには、自分自身の体験から感じたこと、主人公の気持ちに寄り添った考え、そして、大人顔負けの強い意思などが伝わってきました。皆さんは、本を読んだだけではなく、読書感想文にまとめることで、本の世界の素晴らしさを教えてくれました。これからもたくさんの小・中学生が、本の世界を飛び回れるように、弘前図書館のスタッフとしてお手伝いできたら幸いです。

（成田百佳）

▼今年度の第四十九回弘前市小・中学生読書感想文コンクールは、小学生、中学生あわせて三六八点の応募があり、歴代最多の応募数となりました。応募してくださった皆さんと本との出会いがこれだけ多く生まれたということであり、読書感想文コンクールを運営する立場からだけでなく、図書館の一スタッフとしても大変喜ばしく思います。

書いた人の感情、思いの込められた文章には、読んだ人の心を動かす力があると思います。本を読んで皆さんがそれぞれ抱いた思いがあるように、皆さんの書いた文章からはその抱いた思いを伝えようという気持ちが感じられました。今回応募していただいた作品に直に触れ、文章の持つ力強さというものを改めて実感することができました。

皆さんがこれから先もたくさんの本をその手に取り、新しい世界と出会い、心をより豊かに育んでいかれることを祈っております。

（濱田真梨子）

▼昨年の第四十八回のコンクールは歴代五番目の応募点数を数え、このたびは圧倒的な応募点数をもって歴代一位となりました。昨年度から弘前市立図書館（弘前図書館・岩木図書館・こども絵本の森）は指定管理者による運営、管理となり、私たちが担当させていただいているのですが、なんともうれしい結果が続きまったく担当者冥利に尽きます。

今回ご応募いただきました各学校の先生方には心より御礼を申しあげます。また業務ご多忙のなかいつも誠実な審査をしてくださる櫛引洋一審査員代表をはじめ各審査員の先生方には衷心より厚く御礼を申しあげます。

どのようなコンクールであれ、審査員の眼力によって真に優秀な作品が登場してくることを思いますと、当市の伝統ある本コンクールは実に市民の誇りとするべきものでありましょう。

さて来年はいよいよ本コンクールも祈念すべき五十回目となります。気が早いのですが、いまから文集の装丁を考えたりして来年に思いを馳せているところです。どうか次回のコンクールにもたくさんの作品を寄せてくださるよう図書館スタッフ一同こころよりお待ち申しあげます。

（山谷英雄）

表紙

装　画　小川　結運

文集　はと笛　2018

平成三十一年一月二十六日　印刷
平成三十一年一月三十一日　発行

編集　弘前市立弘前図書館
発行　弘前市大字下白銀町二―一
弘前市立弘前図書館